

264  
32



始





16

264-32



教員物語



東京

弘道館發行 會社 合名

天正  
8.10.15  
内交





序

私の老母は非常な教員ずきで、世の中に教員程尊いものはな  
いと云つて居る。三つ四つの頃からその母の手一つで育て上  
げられた私が、過古十年間教員生活を営んだと云ふ事は全く  
母への孝養であつたのである。

然し私にも自分として生きねばならぬ時が来た。

私は今、此の老母にそむいて教育界を去らんとして居る。教  
員物語一篇は實に這般の消息を物語るものであつて、云はゞ  
教育者としての私の自叙傳である。勿論其間に於て幾多教員



諸君の生活をも描寫はしたものと、それはほんの挿話たるに過ぎないのである。

私は本書に於て思切つて自己の眞生活を開放した。陰慘醜汚なる教員生活の眞相を展開した。それがために中には教育者を罵倒するやうな文字もあれば、云ふに忍びないやうな先輩や同僚の實狀も出て来る。校正に當つて努めてそれらは削つて見たが、やはり削りきれなくて其のまゝ、残つて居る個所も少くない。だが然し私は教員諸君を痛罵して自ら快しとする者ではない。教育者としての偽らざる生活を展開する事によ

つて天下二十萬の教員諸君が如何に悲痛な生活を営みつゝあるかを世の識者に訴へたいのが私の衷情である。

今や教員問題は勞働問題と共に社會の重大問題となつて來た。然し乍ら根本的に此の問題を解決せんとするならば、教員生活の何物たるを突き究めなくてはならぬ。本書が若し、夫れ等の人々にとつて多少の參考資料となり、且つは教育者自身の生活改造に向つて何等かの暗示を與ふる事が出来るならば誠に私の光榮とするところである。

大正八年九月

著者







△田舎教員戀物語……………三六

△別れし蔦子に……………三五

△たつた壹圓だが……………三〇

△此れでも教員です……………二七

△輕石のやうなものだ……………二六

△或る一日……………二六

△勤續三十年、三千の負債……………二七

△中折帽はかぶつたけれど……………二七

△教員いろは歌……………二八

△僕の通勤姿……………二五

中 師範教員物語

△二つの理想……………八六

△友へ……………八六

△結婚……………九四

△共稼の經驗……………一〇一

△共稼の爲に世界が狭くなる……………一一

△動搖……………二五

△スローピング、ホーム……………三三

△都會への第一歩……………三七



△出世策……………一三〇

△辨當屋……………一三三

△教員でも生きて行ける……………一三六

△安價生活法……………一四二

△榮達發展の途……………一四五

△若い主事さん……………一五八

△福か禍か……………一六〇

△學務課長邸の一夜……………一六四

△教員出世がしら……………一六八

△風聲鶴唳……………一七五

下 高師訓導物語

△教員成金……………一八一

△古都を目ざして……………一八七

△着任……………一九一

△第一印象……………一九三

△官僚式小使……………一九六

△判任官集れ……………二〇〇

△初めて質屋へ……………二〇一

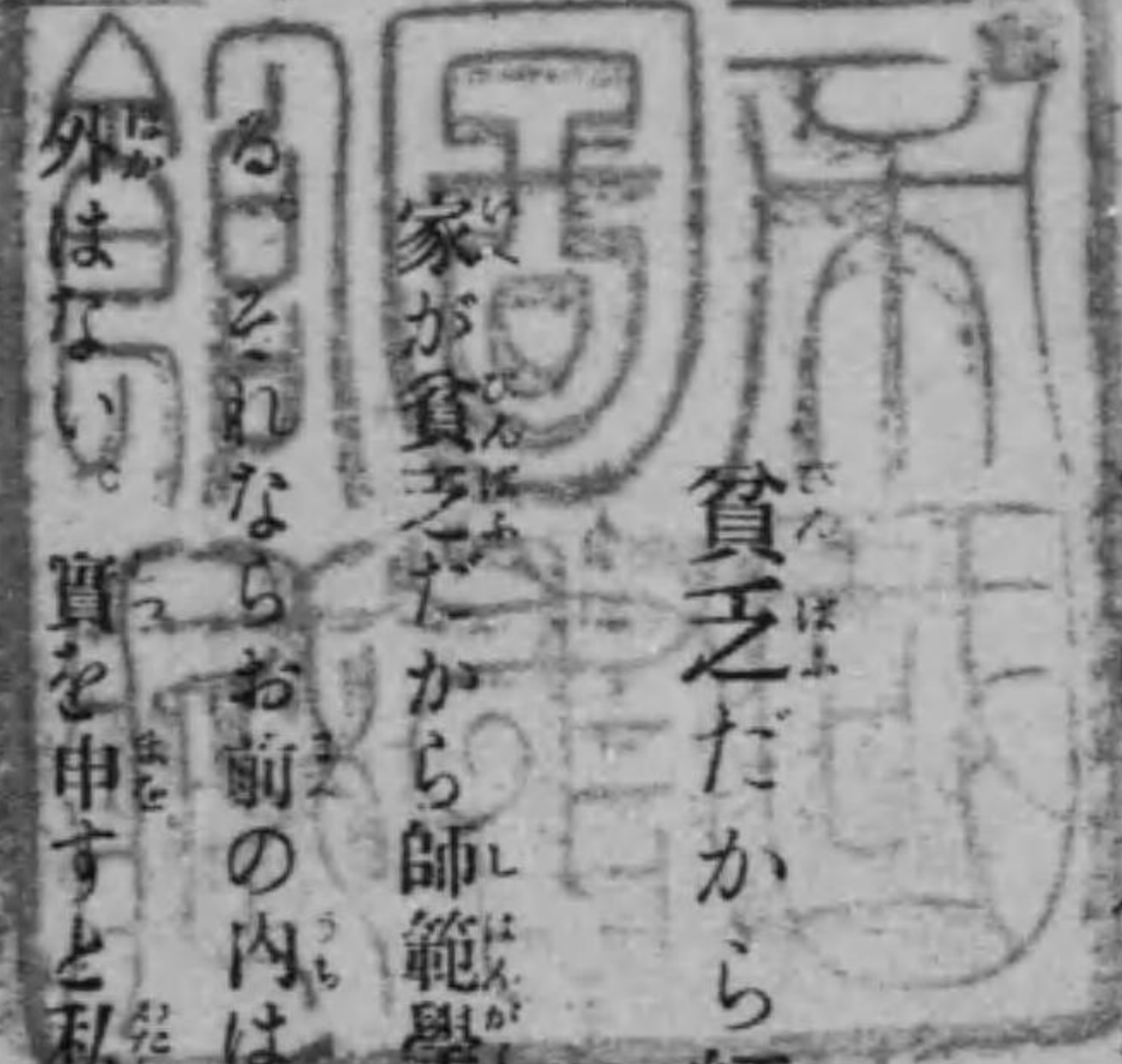
△薄らぎ行く友情……………二二三



△梧桐の葉かけ	二二六
△而立日記	三三〇
△宴會どころか禪がかけぬ	二四二
△存在すらも認めない	二四六
△粥をすすゝる音	二五〇
△體操が出来ぬ	二五三
△後任はだれ	二五五
△藝妓をどうする	二五九
△三錢のうどんが一杯	二六六
△藝がないから教員する	二六九

△文相の賢明にまつ	二七一
△焼石に水	二七六
△裁縫研究會	二七六
△怠け者の手あそび	二九二
△六月の中旬	三〇〇
△女郎教員	三〇三
△良心を傷くるから去ります	三〇七
△村會議員となつた友に共鳴す	三二〇
△放課後の職員室	三二八
△生活問答	三三〇





上田舎教員物語

貧乏だから師範学校にはいつたのではない

家が貧乏だから師範学校にはいつたのではない。徴兵逃げてない事は勿論であ

る。それならお前の内は金持であつたかと問はれると、恥し乍ら否とお答へする

外はない。實を申すと私の生れた頃は十萬や二十萬の財産はあつたかも知れない  
が型の如くに父が失敗してからは文なしの素寒貧。三つ四つの頃から父は家を外  
にして放浪の旅に上る。博徒の群に投ずる。勝氣の母が纖弱い腕一本で、夜の眼

目次終

- △ある夜……………三二六
- △南瓜の安賣……………三三一
- △貧しきものは貧しき也……………三三四
- △貧しきものは其の心卑し……………三三七
- △後髪引かるゝ思をして……………三四一



も寝ずにお針を運んだ所でいくらにもならない。どこの詰りが、家も屋敷も人手に渡して一家五人が叔父(父の姉婿)の居候となる事となつた。叔父とても元より豊かてはない。私は子守奉公に出される所をたつてと云ふ母の願ひで高等小學に出された。高等科を出るとすぐ役場の給仕にと云ふ話であつたが母が承知しない。「ちや一體どうするつもりです」叔父の語氣は荒かつた。

『はい、先生にします』母の言葉もきつぱりして居た。

『教員に?』

『はい、これから師範學校に入れて一人前の先生にして見せます。私は裸になつても此の子だけは……』

叔父はたつては争はなかつたが、母は氣がすまぬと見えて甲高い聲で何かとま

くし立て、居た。何でも其の時の母の意見によると世の中に先生程尊いものはない。そして自分は先生が一番好きである。金など云ふ物は何程あつても何の役にも立つものではない。自分は幾十萬の財産家の嫁として他人に羨まれ乍らとついで来たのであるが、それ此の通りの身の上、それに商買などして居ると人の心がさもなく卑しくなつて来る。そこになると先生程立派なものはない。私は貧乏しても好いから「先生のお母さん」と云はれて死にたいと云ふのであつた。それから私はとある私塾には入つた。そして朝にも晩にも先生の尊い事を母の口から説かれた。そして私自身も立派な教員志願者になつて居た。師範學校の入學試験の時に「何故師範學校にはいる?」ときかれて、即座に「私も母も先生が大好きですから」と答へて意氣軒昂たるものであつた。入學し得た時の喜びと云つたら本人







郷遠き寒國に詫しき住ひをなし給ふからには、いかに吾等の事を案じ給ふらん、と思ひ出でたるまゝに吾がその日その日の事ども、拙なき筆もて述べ申さん、せめて、御身の爲に辛うじて範門を出でなんとせる愚弟の心の端々なれば、寒き夜のつれづれになりと暖爐にあたりて讀ませ給へ。

二月十五日、晴、

紅きも白きも漸く蕾を破り候、梅は香によりて一しほその美しさを増すものにて候、窓近き白梅の昨日も今日も變らぬ香を送り候こそげに快きものにて候。

東の山には尙眞白き雪の麓近くまで積り居り候、あゝ雪の、里御當地の山々には如何ばかり積り居らん、吹き嵐す風も定めて冷たき物に候はんと思はれ候。

春は尙淺く候かな。

十六日、なつかしき御姉上様よ、本日より本校入學試験執行致され候、年若き人々の幾人となき集ひ來れる様を見ては私の心も何時しか遠き昔に走せ申し候。姉上よ、吾れに暫く來し方を偲ばせ給へ。

げに年月は流るゝ水の如きものに候かな、思へば幾年の昔なりしよ、恰も本日じつの如く寒き日に幾干の希望と多大の抱負とを以て受験の途に就き候ひしは。さるに如何なる身の病かありけん體格不合格てふ恥かしき運命に陥りて、空しき四里の道を東に歸り候ひき、かくて御母上様の顔に接したる時私の眼には涙滴の宿るを禁じ難く候ひき、いかに弱き吾が身なりしよ。

あゝ今日も亦吾れと同じ運命に弄ばるゝ人のおはさんぞ！さりとは氣の毒の



至りに候かな。

年若き身に幾多の憂を抱きて菊河の邊にあぢきなき月日を教へ子の爲に慰められつゝ過ごす程に地球は早くも一回轉いたし候て、何時か吾が身は範門の人と成り申し候、母上をはじめ、姉上方の喜びは今も忘れ難く候、その喜びも總て皆今あらんを期したる故に候はん。

げに入學の喜びは卒業の喜びにも増したるものと存じ候、今日集ひ來れる多くの人は近き日にこの喜びを味ひ給ふぞ樂しき極みに候かな。

爾來、滿四ヶ年、矢の如くに過ぎ去り候。その間吾が心身には幾多の變化を來し候、今去らんとするに當りて後の日の思ひ出に尙少しく語らせ給へ。

四ヶ月の試験生々活は頗る無意義のものにて候ひぎ、只命のまゝ之れに従ひた

るものにて何等の定見も之れなく候ひし、さり乍ら所謂師範生風は此の期に於て強く深く養はれ申し候。

かくて此の一年間は順良なる師範生として一時の缺課もなく終へ申し候。

二年生となりし頃よりそろりと文學の道に入り候。その爲大なる變動を精

神上に及ぼし申し候。加ふるに外界よりの刺戟も亦甚しきものにて候ひき、

五月には叔母君を失ひ七月には父上を失ひ、私の心は殆んど狂せん許りと相

成り候。吾れは憂ひを分つ人なし、苦しみを訴ふる人なきに惱まされ候、か

くては半夜夢さめて只一人吾が身の來し方、行く末を案じ申し候、その苦しみを

訴へ、その憂ひを分つものげに一管の筆にて候ひき、一冊の文學書にて候ひき。

筆を取りては自ら吾が身の事を書き綴り、小説など、銘打ちて樂しみ居り候



はてはかた苦しき幾何代数の難問をなさんより此の方遙かに面白く相成り候て  
寢食を忘るゝの域にまで至り申し候。

その結果は「學科の成績不良」と申すものにて候ひき。

かくて吾れは天晴の文學者と成り濟まして三年の春を迎へ申し候。

古人も申し候、「窮する者にして初めて詩をよくす」とか、詩を能くするもの

の窮するにては之れなく候、かく申しては私が大詩人の如く聞え候が決し

てさる事にては無之候、さり乍ら私の成績不良に陥りしは詩の爲にて候ひき

その詩は、吾が家、吾が身の窮せる故にて候ひき。

私は今「境遇と文學」、「境遇と教育」と云ふ二問題を捕へ居り候も今は略し  
申し候。

三年の春は遂に來り申し候。

醒めよ！醒めよ！と自ら叫びて起ち申し候、然し其の實、醒めたるか迷へる

か明かならず候、文學は斷然根を斷たれ候、其餘派は人生てふ問題に移り

候、深刻なる悲哀、自我の實現我が生の目的等常に吾が小さき胸中を掻き廻り

候て所謂煩悶やるせなき頃にて候ひき。

不平も起り候、失望も之れあり候、さり乍ら歸する所は「只母上の爲に」

といふ大なる悟りにて候ひき、人生の目的、生の價値、吾が將來、皆、母てふ偉

大なるアイドルの爲に解決され申し候、以後の私には何等の煩悶なく何等の

不平なく只輝ける前途を望みて進み申し候、時折靜なる波上に激浪を送るは只  
現實上の問題にて候ひき。



四年になりては一學期の教生期間、こよなき樂みの一にて候ひき。  
二學期、三學期、只前途の希望にのみ憧がれてすごし候、倫理、教育の研究  
之れ今私の心中を支配せるものにて候。

あゝ、京陵の四ヶ年間、吾は斯の如くにして経過いたし候、流るゝ水の濕し  
て得たる年々の收穫は極めて少きものにて候はん、されど今は近日に卒業てふ  
大なる階段を踏まんと専ら心勇み居り候。

あゝ今日しも降りたる幾多の受験生の中には私の如き徑路を踏まるゝ人もあ  
らんものをと、思ひ出でたるまゝに、山鳥の尾の長々しくも書き續け候、今日  
はこれにて失禮仕る可く候。  
十七日、

日頃は目にも付かざりし新聞の電報欄、大連通信等、姉上の御出で給ひしより  
常に第一に認められ候ぞおかしき事に候。

卒業に餘す所一ヶ月許りと相成り申し候、靴よ、洋服よと騒ぎたつ學友の様  
をみては誰人も喜ばしきに異りはなきものと存せられ候、私の如き一着の制  
服さへ作り得ざる身にも尙且つ卒業の運命は運ばるゝものと存じ候。卒業後の  
希望、抱負等に就て多少意見なきにしもあらず候へども所謂云ふは云はぬにまさ  
る今は黙し申し候、幾年後の吾が働きを御覽あらん事を希望いたし候。何れ  
世は強者の物にて候、私の如きは起ちて世の強者たり、又強者たらん人と争  
ふ可き勇氣は之れなく候、哀なる人よと笑ひ下され度候、されどかの小山の  
陽小川の邊老いたる母上の爲に一畝の菜を作り、時に網を投じて細鱗を參らす



は易々たる事にて候。

尙可憐なる兒童等の父となりて、よき人を作り、所謂強者たらしめ、又強者たらん人の爲に萬事便利を計り力をつくす可きは私の務めにて候。

姉上等は、活動の巷におはします故奮ひて世の強者たられん事を呉々も祈りおき候、未だ年老いたりなど、云ひ給ふには早き事と存じ候、我が母上こそよき手本に候かな。

十八日、

暖かなる日、南窓に靠れて日光に浴するは誠に心地よきものに候、誘はるゝまゝに池田の田端を散策いたし候、僅に伸びたる青き麥の畦道をまはりまはりて小川の邊に佇み候へば川向ふの畔に陽炎燃えて雲雀でも登るが如き心地いたし

候、遠く兵舎の彼方なる煙筒より黒き煙の晴れ渡る大空に、むくむくと立ちのぼり半ばにして東へ東へとなびき行くさまなどげに長閑なる眺めにて候。

十九日、

長閑なる一日にて候ひき、暖かき光線は教室のカーテンを洩れて斜に教壇の側にさし込み候、經濟の時間にて候ひしが、先生は、ふとした事より無始無終の宇宙觀を語られ候ひしに私の頭は直にその方に動かされ候。

名聲赫々たる英傑人士の功績も無始無終の大宇宙てふ立場よりして眺め候へば實にはかなき物に候、なすなき吾々の一生も、消え残れる靈精と、朽ち腐れたる肉體とが、些少にても後世の人を益せんには、せめてもの慰めに候。さればとて吾らは徒然として日を消し碌々として生を送らんには餘りに小心者



にて候。あゝ如何にして生の記念を残さんかな！

ふと南の方を見れば遠く宇土槽の上半が槎牙瘦古たる梢の上に聳え、やゝ離れて昨日眺めし兵舎の煙筒只一つ卓然として林樹を抜きたるに黒煙天に漲るが如く吐き出され居り候、見るともなく見ざるともなく暫く我を忘れて眺め候ひに黒煙は煙筒を出て、一間許り真直に立ち登り、次第々々に横に廣がる煙は西へ西へと靡き候て白く淡く果ては廣漠たる大空に吸はれ吸はれて認めがたく相成り候。

既に煙は消え去り申し候、暫くして私の眼は又も南の空に向ひ申し候。こたびは淡き淡き白煙、静々と立ち登り居り候、二間三間と登る中に淡きは更に淡くなつて大空に廣がり候、三分四分五分、何時までか、古の長閑なる現象

は續き申し候。

授業の終り候ても尙私の思はその煙より去り兼ね候ひき、あゝ濃きも淡きも共に一生、前なるは急に且つ烈しくして私の思を引き、後なるは静に然して長くして私の心を刺戟いたし候。

古來早世せし人傑の事業多くは急激にして、世人の注意を惹くもの有之候、されど亦なす事なきが如き凡人の一生にも通じて其の事業を思ふ時は淡き乍らも消えて尙印象を留むべきもの有之を覺え候、先なるを太く短き生と申し候は、後なるは細く長き生に喩ふ可しと存じ候。

あはれ、吾れ等が取る可き教の道は何れを辿る可く候や、世の人多く效果の速にして、一時に世人の耳目を聳動すべき事をのみ欲し候は、太く短き生を



欲し候故にや、私の如きは牛の歩みのよし遅くとも、永く人々の心に残る可き印象を興へたきものと思ひ候。つまらぬ事を永々と語り候て甚だ恐れ入り候。

亦樂村舎

熊本市から二十五錢を投ずると時代後れの輕便鐵道が、高原的色彩を帯びて雑木林や杉並木の間を、遠くに阿蘇の煙を眺め乍ら四里許りも東に走る。三里木、枯木、南方など云ふ所をすぎて輕鐵は終點大津町に着く。その大津から西南一里野川の青い堤に添うて下ると雑木林の表にひよいと藁葺の小さな家が表はれる。そこが亦樂村舎である。

一股指のさゝ川に一枚の板を渡した橋を渡ると右は直ぐ菜園。木槿や薔薇の尺にも足らぬ生垣を見ても此家の新しさが分る。夏ならば濃紫の艶々した茄子や淡緑の胡瓜が、唐もろこしや甘蔗藜の間からほの見える。垣根には幾色かの朝顔が蔓を延ばして咲き誇つて居る。淡紫に熟しかけた葡萄の房に頭をなぶらせて玄關に立つ。

『御免』と云つても暫くは答へる人もない。重ねて強く頼むと、眼鏡のお袋が出て来る。進めらるゝまゝに上ると先づそこらの襖に張られた様々の寄せ書が眼につくてあらう。

『事足れば足るにまかせて事たらず、たらで事たる身こそ安けれ』など、古歌を録したのもあれば、『別れても亦折々に尋ね来て、古巢忘れぬ燕かな』など



云ふ情懷をよせたのもある。その側に燕の繪がある。有朋自遠方來、不亦樂乎と眞面目な筆つきで書いたのもある。それらの筆者は皆私の爲に二十金を醗金してこの村舎新築を助けてくれた人々である。床の間にかゝげた扁額には次のやうな事が書いてある。

亦樂村舎の記

亦、奕也、總也、格也、他の事情と同じ事情ある意を表はす字也。かれもこれれも人も我れもの意

樂。喜也、好也、愛也。心情と事物と適合して相逆らばぬ意を表はす字也。昔は孔子野に在りて子弟を教育す、位と富とを求めず。今志垣氏も亦郷に在りて其青年を指導格正し、勤儉尙武の良風を養成し剛健着實なる美俗を陶冶

せんとす。恩ふに我國現時の狀勢に考へて頗る適切なるを感ず。亦樂村舎の起る偶然にあらざる也。此の堂に集まるの士、事情を同じくし一たび肝膽相照さば心と物と適合して私慾の邪念忽ち消散し一致共同能く事に當り愛好新密互に相助け相益し以て郷黨の模範たるを期せよ。

詔書に、

惟信惟義醇厚俗を成し、と此郷醇厚の風蓋し此堂より吹かん、天行健、君子以自疆不息と志垣君これこれの思へ、語に曰く有朋自遠方來亦樂乎と村舎の記を作る

辛亥 夏日

友人 田 黃 牛

(田黃牛とは私の恩師平田二十先生の事である)



南の縁には青簾ごしに清風が田の面を撫で、流れ込む。北の室には法師蟬の節  
 面白い調律を乗せた涼風がつり葱をゆする。書齋兼用の座敷で主人が手際の川魚  
 に舌鼓を鳴らす事もある。

菜花の頃は萬頃の水田が、悉く薫風揺らぐ黄金の湖と化し村舎の眺望に春を  
 飾り、蛙なく頃、五月闇の螢は縁先の白蝶花を傳うて室内にまで翅ひ込む。春を  
 明月の夜手作りの西瓜に家人打ち集うて物語り乍ら、すだく秋蛩をきくの趣に  
 至つては誠に村舎特有の境地ではあるまいか。

恙うした自然に包まれた一家の人々は皆、美しい自然の嘆美者である。眼鏡の  
 母も年若き妹も主人と共に三十一文字を口ずさんだりして秋の夜長を興じ明す  
 事もある。

ブラシ使ひ乍ら菊の手入れなどしてると、生垣の向うから『一寸々々』と呼ぶも  
 のがある。そつと顔を出すと『あまり甘くはありませんが』と云つて朝仕事歸り  
 の△君が大きな西瓜をそこにころがして行く。團子が出来たと云つては井に入  
 れて來、湯がわいたと云つては招く。娘の子の多くが裁縫に來、息子の悉くが  
 夜學に來るだけに村人の總てが村舎を「先生の家」と呼ぶ。主人の書齋は村の青  
 年の俱樂部である。村の休日にはこの俱樂部で新聞をみたり、馬鹿話をしたり、  
 たまには演説討論の練習までもする。物好きに英語を教へると云つたり、柔道が  
 知りたいと要求したりする若者もある。(亦樂村舎の記より)



亦樂村舎は私が故郷の家である。私は師範を出るなり多くの友の力でその家を建て、叔父の家から獨立した。その時私の俸給が十八圓であつた。その十八圓で私は一人の老母と三妹一弟の口を養ひ、その教育を忽にしなかつた。然も私は世のなべての青年の如くに戀もした。文檢の受験にとて勉強もした。農村青年の教養に如何程力を割いたかと云ふ事はこの村舎の記が物語つて居ると思ふ。

どうして食つていくか？  
 どうして勉強するか？  
 どうして戀に成功するか？  
 私が發見した道は不斷の努力と云ふ事より外になかつた。そして其の努力が果して私の爲に幸であつたらうか？

金の指輪

七月二十九日。  
 昨日しばしの別れにとて飲んだ酒が少し利きすぎたと見えて今朝はすつかり寢忘れて了つた。今日から講習會に出なくちやならぬのにまだ何の準備もしてない。そこへ準備は整ふたがさてたゞ一つ整はぬりは金である。本月分の俸給は殘額僅かに貳圓。夏服代五圓はまるで拂へない。

出る間際になつて母に相談した。母はいろいろと案じて居られたが一圓位なら自分が持つてると云はれる。一圓位ちや何にもなりやしないと、思はずすげなく云ふ。



「もう、そんなに使ったかい」とびつくりした風である。  
 『そんなにつてあなた、何にも使ひはしませんよ』  
 二人の間に可なり長い沈黙が続いた。やがて母は思ひ切つたらしく、「ぢや、あれでも持つて行つて見るか」と上目使ひにして願をしゃくつてみせた。私はすぐに『はい』と答へた。

虎の子の様に母の鏡臺にしまつてあつた金の指輪、私はそれを無造作に受取つて財布の中に収めた。内を出る時『こんな風に順ぐりに足らんなら』と肩根に皺を寄せて云つた母の言葉が耳元を去らない。

途中一寸T君を訪うた。君は昨日増俸があつたと云ふので大ニコ／＼、何時もの調子に似ず大に話した。そして『講習がすんたら直ぐ宿に歸れ、でないとい

ろんな食ひ方許り目論んで金の入る事が妙だ』と云つた。

いやな軽鐵で又氣色が悪くなつた。一隅に黙り込んでるとふと指輪の事が頭に浮ぶ。衣物の外から財布の處を撫で、見る。銅錢の形許りで指輪の形が手にあたらぬ。はてなと思つたがまさか人中で財布を出してみるのもおかしいし、そのまゝに忘れようと努めた。然しその努力は無駄であつた。忘れようとすれば尙更忘れられない。とう／＼袖の中に手を入れて財布を袖の方に送りそつと中の方に指をつゝ込んで見た。無論指輪はあつた、が思はずにやりとせずには居られなかつた宿は無論K先生のお宅である。K先生は私が師範時代にお世話になつた恩人である。先生は夜の十二時までは何かと處世上の話をして下さつた。そして都合によつては自分たちも此の九月頃から田舎の方へ歸らうかと思つてゐる。田舎でな



ら二十七圓もとれば結構だからな。『そして歸つたならぬしでも一人前は働ける』蠶を飼ふなり何なりして』と奥さんの方をひいて云はれた。

『私が歸つてもとても餘計に飼ひは出来ませんよ。子守が入りますし、それに又生れるなら、どうして!』奥さんのお腹は大きかった。今先まで西瓜だの氷だのと駄々つては叱られてとうとう泣き寝入つた姉嬢の綾ちゃんも足をばたばたとばたつかせて蚊帳の方へところげた。

私は指輪の事を先生に話して見ようと思つて居た。若し奥さんでも望まらばならば少し許り貸して貰ふつもりで居た。然し今こんな話をきいては何事も云へなかつた。

七月三十日。

例のを賣らうと思つて町に出る。△△洋服店の前を通ると急に相すまぬ氣がしたので西側に人目をさけて通つた。○○時計店の側に金銀つぶし買入れと云ふ札がかゝつて居たので一寸入らうかとも思つたがそのまゝ行つて了つた。やがて□□兩替店の前に來た。二足許り行きすぎたがおどろろする心を勵まして又引き返した。

『指輪を一つみて貰ひたいと思ひますかね』

男は私から指輪を受取つて延したり叩いたりしてみ居たが、

『何処にありますか』ときいた。

『よくは知らない。量つてみないから』

男はテーブルの抽出からハカリを出して量つて居たが



『二匁九分あります』

『それで幾千位になりますか』

『一寸十四圓二十錢位です』

『十五圓にとつてくれませんか』

『いけませんね』、男は指輪を私の前においてすまし込んだ。

『實はアメリカの十圓金貨をつぶしたんですがね』

『さうですか、それぢやあなた、こうと一匁以上減つて居ますよ、矢張り支那人ですか』

『え、』私 はそれ迄はしくは知らない。何でも此の指輪は放浪の父がアメリカ歸りに母に土産として持つて來たもの。母もさす事は全くないが、私に好い

嫁さんでも貰つたらさ、せたいと云ふので、これまで随分難義をしたが、誰にも見せずにしまつてあつたものである。

『何處ですか、大連ですか』男は又尋ねた。

『え、』只好い加減に返事する外はない。

『あれだからなりませんね、君一寸』と外の男に見せて居た。

『ちや十四圓五十錢にとつて呉れませんか』

『は、よう御座います』

私は金を受取つて領收證を綴つた帳面に自分の住所氏名を記入した。

その時位又いやな氣持のした事はない。その變な氣持をいやす可く私は氷店か何かにとび込んで一杯やりたいと思つて、道々幾度か店頭を覗いてみたが、何故



かどうしてもはいれなかつた。そして宿に歸つてがぶくぬるい湯を二三杯のんだ。K先生はもう寝て居られた。私もすぐに蚊帳の中にはいつた。そして眼をつぶつて母や妹の事を思ふた。

年末賞金七十五錢也

その年も暮に近づいた。教員室では年の暮の話が頻りに出た。餅米のねだんがどうの、あそこの米屋が一錢やすいのと随分論議された。それから年末賞金の額いくらだらう。誰君は無缺勤だから三圓だらうなど、頻りととらぬ狸の皮算用にあつた。その日の夕方校長は役場から廻された一包の辭令を受取つた。そして間もなく一同を集めて次のやうな話をした。

『年末賞金が大へん遅くなりましたして済みませんでした。實は二三日前に來ましたが、役所の方から少し額を高くして來ましたので、役所の方からはそんな豫算がないと云ふ譯で又役所へ送り返しました爲に慙うおそくなつたのです。で金高も甚だ少いのですか、どこもまあこんなもんですからどうぞ悪からず』とまるで自分の金でも出す様なわび様をして一人一人に辭令を渡した。私は就任以來無論無缺勤だつたが受取つた辭令には慙う書いてあつた。

△△尋常小學訓導

何 某

職務勉勵ニ付金七拾五錢賞與ス

明治四十三年十二月二十一日

〇〇郡役所

あゝ男一匹が一年の汗水を垂らしたものに對する賞與として金七拾五錢。私は



つくづく私自身の不甲斐なさを思ふた。何故なればその七拾五錢すらも忝なく頂いて歸らなければならぬ身の上ではないか。

同僚のWは内が金持であるし、それに多少變つた處のある男である。辭令をみて居たが、突然、校長をよびかけた。

『先生、この辭令は折角ですがお返しいたします』とたゞんで校長の處にさし出した。校長はさつと顔の色を變へたが、暫くしてやゝ平穩な色に復した。そして、『まア、なほしておいて下さい』

役所に返して貰ふ譯には行きませんか』

『いかな事もないだらうが、そんな例もないし、まあ好いちやないかねさう云はなくつて』

『私のやうな、なまけ者には賞與などある筈はありません』

『まあ君來年からはよく村の方にも話しとくから、本年はだまつて取つといてくれ給へ』

『どうしても返されませんか、よう御座います、そんならいたゞきませう』彼は貰つた辭令をその場でさつとにさいて了つた。そして賞金七拾五錢は小使に呉れて了つたのであつた。

其の後十年間も教員をし、何百の教員諸君に接したが未だW程痛快な男に出合はない。Wは今熊本市の某小學校に首席としてつとめてる。

中にお金が五拾兩



ある冬の夜、彼は青年の補習夜學を終へて家に歸つた。もう夜の十一時であつたらう、小さな火鉢に白くなつた炭火を眺めて彼の老母が一人彼の歸りをまつて居た。彼は火鉢の側に坐るとすぐ火箸で灰をかきならし乍ら炭をつがうとした。母は一寸炭籠の中を覗いて『もう炭もこれでお了ひだ』と半ば一人言のやうに云つた。

『買つたら好いでせう』

『そら好いけど今日のあれにだつて三圓から要つてるよ』と火鉢の抽出から半紙を縦に折つて拵へた日記帳を出した。彼はふうふうとやけに火を吹いたが母は黙つて胸算用をして居た。やがて、

『餅米も今の内に買つておくと好いさうだ』と云ふ。

『さうですか』と氣のない返事をしたがり二人は黙り込んで了つた。

其の頃から彼は胸を痛めてゐた。折々怪しい咳が出た。體操の爲少し激しい運動をした後なぞどうかすると續け様に咳が出て頻りと痰を吐いた。併し元より彼に醫療の餘裕はなかつた。米三分に粟七分の御飯に御馳走と云つたら月に一度の馬の肉、それも思ふ様な分量はたべられず、だして野菜をたべると云つた様な中から、如何して藥の代りが出よう、底青い顔して首を長くし乍ら彼は學校すらも休まなかつた。或日疲れ切つた足を引ずつて歸つて來ると、思ひがけない一封の書留郵便が彼をまつて居た。水莖の跡も美しい女文字に先づいぶかしみつゝも、おのゝく手もて封を切ると、ぱたりと落ちた五十圓の爲替券、添へた手紙には只だ次のやうに簡単な文句がかいてあつた。



『失禮はお許し下さいませ。前途誠に御有為なお體では御座いませんか、お母上様のため、御妹弟様のため、そしてみ國のためにも、私共の爲めにもお體をお大事になさつて下さいませ。』

月 日

葛子

葛子とはそも何人であるか、そして彼は此の問題を如何に處分したか私はいれから少しく戀物語をしなければならぬ。

田舎教員戀物語

高岡葛子の名は彼が知れるあらゆる異性の名の中で今以て一番懐しい思ひをさせる名である。彼は今だにその名をきくと若き血潮の湧き立つを禁ずる事が出来

ない。師範を出た許りの若い教育者、然もその細腕一つに一家數人の糊口を支へ乍ら、床しい田園詩人の親しみを有した彼は、一面に於て異常な奮闘的生活の鼓吹者であり、實行者であつた。その生活振りがやがて彼等を圍繞する教員團體の噂の種子であつた。

高岡葛子、彼女は彼の愛妹を受持てる一女教師であつた。然も彼女の家は土地の豪家であり、彼女はその豪家の愛娘であつた。只高等女學校を出た後の修養にとて高等小學の履教師をつとめて居たのである。

葛子が彼を知つたのは彼の妹を通してであつた。兒童の保護者としてであつた。次には或る教育會の會合の折であつた。それから以後二人の間には可なり徹



底した了解があつた。それは蔦子の父が其の土地の有志者である關係から彼は度その家に入居して、いろ／＼と教育上の意見を闘はす事があつたからである。或日それは田舎教員にとつて最も楽しい秋祭後の一夜であつた。數軒を飲み廻つて酔ひつづれた教員の一團は最後に蔦子の家を襲ふたがもうとても、主人も客も飲みも出来ねば話も出来ぬ頃であつたので、好い加減に一同は引き上げて了つた。

其の夜である。彼は酔つぱらつた彼の同僚がそこに打ち倒れたのを世話しなければならぬ必要から、そこに泊る事になつた。彼は元より酒に酔ひうる人間ではない。朝の二時頃でもあつたらう、蔦子と彼とが只二人黙つて火鉢の側に坐つた。突然彼は、

『今の婦人が第一に渴望してるのは何でせう』と切り出した。

『……………』

『富でせうか、名譽でせうか、地位でせうか』

『まさか、そんなの許りぢやないと思ひます』

『ぢや何でせう？』

『外のお方はとにかく、妾はそんなものは餘り好ましくありません』

『なぜです』

『そんなもの、無意味ですもの』

『無意味つて？』

『人間としての意味で御座います、妾共はそんな物質的の事に一生を送りたく』



はおりません。人間として生れ出た以上はもつと何か活てゐて生甲斐のある仕事  
がしてみたい御座いますわ』

『うむ面白い、それはあなたの眞の叫びですか』

『妾は絶えずさう思ひます』

『若しあなたが嫁しづくとしたらどんな人を選びますか、ありのままに云つて下  
さい』

二人の聲は大分接近して居た。そして聲は極めて低かつた。

『まじめな人生の奮闘者がほしいと思ひます』

『貧乏者でも』

『え、』

『地位がなくとも』

『ハイ』

『女は誰でもさうでせうか』

『どうか知りません。妾は偏狭かも知れませんが、親ゆづりの財産にあまへた  
お坊ちゃん嫌ひです、逆境にある人や、お内のやかましい所や小姑の多い所に  
行つて粉骨碎身、充分自分の力をつくしてみたいと思ひます』

『高岡先生』

『ハイ』

『女は虚榮の結塊と云ふちやありませんか。あなたは眞にそんな事で満足出来ま  
すか』



『どうぞ妾を信じて下さい』

『然し、それぢや女が...』

『人生はそれでこそ初めて意味があると思ひますわ』

『今日の糧がなく、飢ゑるやうな事があつても』

『私のベストをつくします』

『夫が肺結核にかゝつて悶え苦しんでも』

『二人の間にはやゝ長い沈黙が続いた。葛子は泣いて居た。』

『先生』

『え』

『私に行きます』

『あゝ、私はあなたのやうな人にあつた事がなかつた』

二人の中にある火鉢の上にはその日の新聞が廣げられて居た。そして新聞の下には彼の手と葛子の手とが...

私はこの戀物語の末路を語る勇氣がない。幸にして彼の病氣は葛子の燃ゆるが如き同情によつて大事に至らなかつた。然し葛子そのものは今彼の細君として彼の爲に所謂人生の奮闘を續けて居るのではない。

別れし葛子に

踊り立つ胸を押へて懐しい玉章を拜見いたしました、そして直ちに筆を取りま



す、狂ひ立つ思を静めつゝ、冷やかに理智の筆を取りたいと思ひます。  
 何時からか話もしたい、手紙も上げたいと思つて居ました。然し私の理性はそれを許しませんでした、圖らずも今日、久方振の御便りに接して、斷然積日の意を決して筆を取ります。

過去を葬れとなら總てを葬りも致しませう、いや私はもう既に既にこし方の様子を闇に葬つて居ます、然し總てを忘れよとは無理ではありますまいか。私にこし方の懐しい追懐の總てを忘るゝことが出来ませうか？あゝ如何してそんな情のないことが出来ませうか？

私は潔く過去を葬りました。  
 過にし三月の或日、懐しい御身と御別れ致してから、私は斷然あなたを普通の

女だと思つて居ました。時折思を亂す種とて數ある手紙堆く積んで淋しき一夜、灰燼としました。更に永い日誌の中から御身に關係ある記事の總てを抜き取つて、これも煙として了つたのです。

然し私は常に御身の事を忘るゝ事は出来ません。恐らく私の一生を通じて忘れられない深い印象だと思ひます。

葛子さん、せめて美しかりし昔を偲ぶ事だけは許して下さいませんか。

Sさんの事だつて同じ事です、私はお二人は終生忘れまいと思ひます、忘るゝ必要もありません、あなたは何故に思ひ出したやうに、あんな事を云ふのです、葛子さん、あなたは私を信じて呉れないのですね。私は意志の弱い輕薄な、吹けば飛ぶやうな男でせう！冷めた人、さうだ狂熱の夢？から醒めて冷やかに私を



客観して始めて私の性格、私の氣質にいやがさしたのでせう？然し私は何時までも御身方を信じます、私の胸には清い清い昔の泉がまだ涸れずに居ますもの。戀人として御身方を思つた私の心は若くありません。然し世の若き人並の、ラブよ愛よと騒ぐのとは、幾分か意味も違つて居たと思ひます、頼甲斐ある家庭の内助者を得たいとの痛切なる望（それは私一家の者總ての！）から起つた戀ですもの。むしろそれは哀れに悲しい戀ですもの。それに身分も地位も辨へずに御身を戀するなんて、愚かな私でした。然し今となつて忘れよと云つて下さるのは何となく心苦しう御座います、戀は戀でした、然し決して、疚しい事もなかつたでせう。よし蟲鳴く一夜を月に泣いて語り明かしたと、云ふ美しい印象は残るとしても。

葛さん、あなたは口善悪なき女子たちの耳から耳へと傳はる噂を聞いて、今更私を疑ふのでせう、御身が頼める人を夫とし、私が信ずる人を妻として迎へるとも、そこに何等の悲しむ可き事も、呪ふ可き事も、嘲る可き事もないではありませんか。

葛子さん。

奮闘に疲れた若い旅人は、まつはる幾多の係累にしがみつかれて、尙も悲しく淋しく苦しい戦闘を續けて居ます。夢に描いたエデンの園、樂しきホームに達するにはまだ道も遠いやうです、御互に氣も心も境遇も知りつくした仲ですもの、よし夫たり、妻たる事は許されぬにせよ、せめて美しい心の友、家の友として長く長く私の爲に優しい美しい昔乍らの心をつくして下さいませ。淋しき子が敢果な



き願ですもの……  
 あ、筆は何時か情熱に走せて了りました。もうなんにも申しませぬ。さらば  
 健やかに蔦子様。

たつた壹圓だが

三月から四月にかけて教育界はさまざまの活氣を呈する。教員仲間では之を地震期と稱する。同じ地震にも上下動、水平動、上下水平動の三様がある。上下動と云ふのは最も好い方で所謂増俸を稱する。水平動は轉任である。然して最後のは轉任と同時に増俸を意味する事は申す迄もない。三月の末から教員たちは何となく心忙しい、胸に一物ある連中は苦しい中から菓子折の一つも下げて視學の門を叩く事は少くない、よるとささはると月給の話である。君は上るだらう、いや君は保険付だ。△△君は實に幸運兒だね、何ありや游泳の達人だよ。こんな話は耳にタコの出来る程きく。ともかくも教員が最も強く頭を向ける問題は増俸問題である。かく申す私自身も月給に就てはどれ位心を悩ましたか分らない。私は其の詳細を説明するよりも其の頃の日記を抄した方が早い。

四月十日 月、晴

筆もつ心先づおの、く、あ、萬感往來思ひ徒にしげき日なりしよ。  
 教員増俸の事があつた。澤も山邊も（私の同期卒業で近所の學校に出て居るもの）その榮を擔つた。そして自分一人その榮に加はらない。何故だらう。自身自身は増俸目あてにはたらいてるのぢやないから何の痛痒も感じないのであるが



(其の實大々的に苦んで居たてはないか) 母の事を思ふと何となく不安で堪らない。どうして自分だけがとの考へがすぐに湧いて来る。自分のはたらきが足りないのだらうか? 自分の識見が足りないのだらうか。いやいや、澤が二三が六と教ふるものを自分が二三が七と教へた事はない、いろはのいは彼も自分も左から右に曲げて書く。高が子供相手の仕事、どれ程の違ひがあらう。

唯疑問である。自分もまだ凡人である。定めし世の人々は俺を笑つるだらう。無能な男だと話し合つてるだらう。無能ならもつと勉強も仕様、然し澤や山邊に劣らうとは思はない。

まゝよ、自棄糞だ。然し棄自は結局お前の損だ。とは云ふもの、氣概あり覇氣あるの青年がとても堪ふる事の出来ない侮辱ではないか。好し矣、今日限りだ。

何だ教案が何になる。学校の仕事? 好い加減なものだ。いくら早く来て遅く迄勤めた所でそれが何になる。授業がすんだらさつさと歸ることだ。朝もゆつくり来る事だ。そしてどんく倫理の研究(其頃私)は倫理の検定を受くるつもりで勉強して居た)をやらう。

だが然し『人知らずして慍らず』と云ふ事もある。自分は自分だけその信ずる道を行つたらどうだ。増俸、たつた一圓ぢやないか。そんな事に無頓着に働けば働く程お前の面目が益々輝くぢやないか。凡て不平不満を云ひ自暴自棄をなせるものは世に拗ねた人だ。世の拗ね者となる事は自分にとつては大した事ではないがさて母を如何しよう?

あれかこれかと考へ續けるとはてしが無い。夜の十時までも教室の暗がりに考



へたが、はては唯だおかしくなつて馬鹿々々しくて堪らなくなつた。なんだこれしきの事では云ふもの、矢張りこれが重大問題である。

家に歸ると母はもう床に就いて居た。戸を叩いて起す。戸を開くるより早く母の口を洩れたのは、とりもなほさず増俸の事。先程Sさんが来て大變不審がつて居た、いくら新聞を繰り返して見てもお前の名だけは出て居なかつたと云つたが

「私は何事も云ひたくない。」

「お前一人、働きが足らんからたい」

「同期の人に皆後れて恥かしくはないか……外聞が悪いぢやないか」

自分も恥かしい。辛い。然し母から此の言をきくのが尙辛い。私は黙り込んで床についたまゝ、倫理學史を繙いた。然し頁は一つも進まないで眼は依然として冴えた。

次の室からは母の歎息の聲がきこえる。

四月十一日 火、晴

朝飯もすゝまない、母の手も碌に動かない。私は腫れ物にでも觸る様な心持で居た。どうか問題が出ねば好いがとそれ許りが氣になる。然し私の苦心は無駄であつた。母はとうとう堪り兼ねた様に語り出した。

「△△では好い先生（母は未だに教員と云つた事がない）はやとへないのだから。金がないのだな。年末賞與もあつたし。そんな風なら馬鹿らしいぢやな



いか、轉任てんにんするが好い。内にどんな用事ようじがあらうとたつた一日いちにちも缺かがさずによつてるのに。夕方ゆふがたなど少し早く歸かへつて野菜やさいでも作つくつた方が好い。あゝ耳みみが痛い。始業しげふまへ前まへ二十分昇校ふんしちやう、殊更ことさらゆつくりとかまへて出勤しゆきんした。授業じゆげふも好い加減かげんにやつて退のけ様やうと思おもつたが。さてそれ許ばかりはどうしても出来できぬ。自分じぶんひとり一人の悶々もんくのため天真てんしんな人ひとの子こをまで……とは云いつたものゝ矢張やはり授業じゆげふは物ものにならなかつた事ことであらう。

\* \* \* \* \*

それから私は一月程つきほどおくれで増俸ぞうほうの辭令じらいに接せつした。校長かうまちやうの辯解べんかいによると矢張やはり村むらの經費けいひが足たらない爲ためめださうな。たつた一月位つきほどどうにかなりさうだとは思おもつたが、その頃ころの私わたくしには何なんとも云いふ事は出来できなかつた。それにしても恚いかうした事實じじつが

世よの中にどれ位くらゐ澤山たくさん存在そんざいする事ことだらう。此この問題もんだいを一掃いさうする方法はうほうは只ただ小學校せうがく教員きやういんの俸給ほうきふを國庫こくこ支辨しべんにするに限かぎる。

義務教育費きふぎよくうひを國庫こくこの支辨しべんにする事に就つては識者ししやの間に相當きやうたうの論議ろんぎがある様にやうきいて居ゐる。各地方かくちほう町村まちやうから當局たうきやうに向むかつて若干せきくわんの運動うんどうを試こころみつゝある事も事實じじつである。然しかし乍はなら現文相げんぶんさう中橋なかつはし氏は支辨しべんに反對はんたいの意見いけんをもつて居ゐる。その理由りゆうは町村まちやうは富とんで居ゐる。決して教育費きよくうひを國庫こくこが負擔ふたんしなければならぬ程ほど貧乏ひんぱんではないと云いふ點てんにあるらしい。又また町村まちやう自身が運動うんどうの理由りゆうとする處ところも、財政ざいせいの窮迫きゆうぱくにあるらしい。然しかし問題は單ただに町村まちやう財政ざいせいのそれのみには關かんせない。全國ぜんこくの教育きよくうを普遍的ぱんてんてきに發達はつたつさせる爲ためめにも、或あるは教員きよくういんの待遇たいぐうに厚薄こうはくなからしむる爲ためめにも當然たうぜんひつたう必要な事ことである。今日こんにちの五割ごわり増俸ぞうほうなども随分ずいぶんまちまちな箇所かしょがあるやうだが、それらは一片いっぺんの報告位ほうこくぐらゐではまだ真相しんさうは分わからない。教員きよくういんの一々いちいちに就つて深く探たんづてみると意外いぐわいな事實じじつに達着たつちやくするであらう。

此れでも教員きよくういんです(准訓導心得物語じゆんくんとくこころえものばなし)



准訓導心得又の名を代用教員とも云ふ。有資格教員不足の爲めに無資格者を以て代用したものである。町村經費不足の爲高級な有資格教員を揃へる事が出来ずにわざと年少薄給の教員を以て代用するのである。同じ代用教員でも教員として立派な人も少くないが。中には高等學校入學失敗の落武者で來年の受験期まで鳥渡小遣取につとむるもの、師範學校入學志望者で入學準備旁心得をなすものなどが最も多い、然して此等の連中には随分如何がほしいものも少くない。

嘗て私が田舎で首席訓導をつとめて居た頃下と云ふ准訓導心得の教員があつた。高等小學を出てから何箇月かの准教員養成講習を受けただけで師範に這入る前例の如く私の學校に備はれて來た。

或年の十二月、私と今一人文學好きの若い教員とが、九州日々と云ふ土地の新

聞が新年讀物の一つとして募つた短篇小説に應募すべく頻りに筆を運ばして居るのを、いぶかしさうに見て居たが、突然その若い方の教員を捉へて、  
「U先生、それは何するのですか」と切り出した。Uは有名な頓智家であり又諧謔家である。一寸Fの顔を見てにつこり。

「これ？君はまだ知らなかつたのか、こりや君懸賞小説だよ」

「懸賞小説つて何です？」

「懸賞小説は君、先生達が省出すのだよ、ねえ〇〇先生」と私の方をむいて眼くばせをする。私もおかしさをやつと我慢して、

「え、僕のはもう出來上つたよ」と相槌を打つた。

「へえ、何處へ出すのですか」



「そりや君新聞社だよ」

「何時までに出すのですか」

「何時までって、明日が切だ。君はまだ書かなかつたの？」

「はい、私ちつとも知りませんでした」

「そりや早く書かなきゃ」

「私は到底噴き出さずには居られなくなつたので其の場を逃げ出したが、F君はさあ大變、それから洋紙を購うて来て縦横に野を引いて原稿用紙を手製した。それから宿直室に引き籠つて一心不乱に書き初めた。餘りなぶるのも氣の毒と思つて好い加減にする様にUに忠告して私は先に歸つたが、翌朝出勤して見ると宿直室にはまだランプをともしたま、F君は朝飯も食はずに何か書いてゐる。昨

夜よもすから一睡もせずにかいたのである。そして出来上つたのは何であらう。果して如何なる短篇小説が出来たらう。題に曰く、

一、我が校の運動會

二、なば取の記　なばとは茸と云ふ言葉の方言)

もう一つ何かあつたが思ひ出せない。F君はそれをちやんと封筒に納めて書留郵便を以て新聞社に届けた。知らず其時の選者は之を何と見たであらう。

F君に今一つの逸話がある。それはF君が師範入學試験を受けた後一週間ばかり立つた時の事であつた。或朝、F君は一通の辭令を以て私の處に挨拶に來た。不審に思ひ乍ら開いて見ると。

〇〇縣〇〇郡〇〇尋常小學校准訓導心得

何

某



右者師範學校入學豫備試験合格ニ付月給金八圓支給ス

明治 年 月 日

〇〇郡役所

と増俸の辭令である。ぐつと咽喉元までこみ上げて来た笑を抑へ付くるにどれ位骨折つたか分らない。笑ひ出す可くF君の顔が餘りに眞面目であつたからである。

『お蔭でありがたう御座いました。就きましては今日放課後少し許りですが御馳走しますから』

『へえ、お祝があるんですか、増俸の』

『はい』F君聊か得意の色を示して居る。

此れも全くUの悪戯であつた。私はF君の幼稚を悲んだが、然し更に情なく思つたのはその辭令を示されて、F君同様之を事實と信じた一人の訓導と一人の女專訓の人があつた事である。

その頃萬朝報は東京市の小學教員に對して漢字の試験を試み、その結果頗る成績不良であつたと云ふので、一頃社會の問題となつた事があつた。何萬とある漢字、少々知らないからと別に大して困りもすまいが、さてF君のやうな人が二十萬の同僚諸君の中に幾人あるだらうか、私の話は明治時代の事であるから可なり古い、然し人正の今日矢張り十七八歳の生徒か教師か分らぬ様な教員を見受くる事は少くない。世には一本の菊を育つるにさへ子供や他人に託し得ずして必ず自ら手を加へなければ承知が出来ない人もある。菊苗と人の子とは私の眼から見れば比較にならないのだが、さて世の中は廣いもの、F君のやうな先生に自分の子を一任して天下泰平な人も亦少くない。併し之れは國家としても今少し考ふべき問題ではあるまいか。



或若い教員が嘗て福羽子を訪問した事があつた、于「君は何をしてるかね」教「教員をして居ます」于「そりやいかん、若いものが教員しちや馬鹿になつて了ふよ」

輕石のやうなものだ

未明に野良に出て月を踏んで歸る。一日十五時間の労働、然もその打ち下す一鍬の如何は直ちに彼等が秋の收穫に影響する、彼等の活動には決して一分の無駄もない。百姓は決して樂な仕事ではない。

八時より四時まで、山積した事務を澁滞なく處理し、然も過誤なく解決し行く官公吏の仕事も亦決してのん氣なものではない。彼等の仕事は相當機械的な性質を帯びては居るが、一字一項の誤謬も許されない其の事務的苦痛に至つては又相

應の緊張を要する。軍人の練兵でも、電車の運轉手でも、商店の番頭でも夫々相應の努力を要し、精神の緊張を要する。其の勤惰は直ちに以て事業に表はれ、事實に出て来る。だから決して怠けては居られない。その代り業務を終へて家に歸れば誠に安らかなもの、可愛い子供に耳を引張らせて細君から井戸端會議の報告を聞きうる餘裕がある。

教員の勤務は如何?

始業前一時間出勤、教室の整理、教授の準備、兒童の看護。次で午後二時乃至四時に至るまでの課業。放課後の會合、曰く研究會、曰く職員會、曰く訓練打合會、曰く調査會、曰く何々研究部會、曰く何會、曰く彼會と會の多い事。會員驚く勿れ一名、會長一名、副會長一名、と云ふ奇抜ささへある。然して敢て議題を



要せぬ。議す可き肝要の問題があつての會合でなくして、會合したから何か議せやうと云ふのである。會合がなくてもやれ掃除の監督だし、やれ劣等兒童の特別授業だ、やれ入學準備教育だ、やれ教案だ、やれ教具の製作だ、とこれも亦なんだ。彼だと名の多い事仕事の多い事。いやはや誠に恐れ入つて了ふ、とても五時間や八時間どころの話ぢやない。夜が長くなると補習夜學が始まる。十時十一時と時間割かねばならぬ。恙うなつて來ると正に一日十五時間の労働となつて來る。教員とても決して樂なものではないと云へる。

然しこれは實は表の話で、教員生活の實狀に接せぬ人から見ると誠に同情に堪へぬ様ではあるが、さてよく聞いて見ると何でもない。十五時間の時間中果してどれ程の緊張があるか、最も緊張して居る筈の教壇に立つて居る間は心は空で

外の事を考へる事が出来る。研究會など眠つて居てもつとまる。同じ十五時間でも電話交換手や運轉手などのそれとは天と地の違ひがある。彼等の業務にあるや徹頭徹尾精神を緊張さして居なくてはならぬ。寸刻の油斷も出來ぬ。併し乍ら教員のそれは何處をついても穴だらけである。四十五分間毎には休憩がある。その四十五分間の授業中すら前述のやうであるとすれば、教員の勤務はまるで輕石のやうなものだ形はいくら大きくても質量の輕さと云つたら。

教員は忙しいとか仕事が多いとか云ふ聲を多くきくが、その邊は今少し根本的に考ふべき問題が残つて居る。然して視學を初め、苟も教員の上に立つものは教員の勤務問題に就て更に根本的に考へなほす必要がある。労働問題は決して職工の獨占物ぢやない。



或る一日

眼を閉ちて『憧憬』の頁をまくる。憧憬は私の日記（明治△十△年度）の名である。

十月二十六日。火、晴

白菊馥郁、蕾を破らんとす。前庭の蝦夷菊漸く萎む。銃聲時に屋後の林にひびきて秋既に老いたり、木々の黄葉半落つ。半面の凋落は半面の建設ならざる可らず。凋落ありて新設なきは枯渴衰滅なり。吾人の前途や如何。

S子、懐しきS子は既に吾を去れり。吾は戀を失ひしなり。  
金。俸給。昨日貰ひし俸給も今日は早や空し。然してなほ支拂ふべきものは残

れり。吾は負債を得たるなり。

豫定の頁には未だ達せず。青年夜學は初まる。あゝ吾れ失ふところと得たるところとありと雖も。何ぞ其の皮肉なる得失ぞや。

二度眼を閉ちて頁をまくる。

十二月九日。土、曇、さむし

午前五時夢さむ。直ちにランプをつけて腹這ひたるまゝ昨夜の續きを讀む。カントの十二範疇なり。聊か頭を要すれど其の組織整然たる所面白し。六時母に起きて貰ふ。六時半床を出で、戸を繰る。河水は今日も濁れり。甕の薄氷を破りて水をかぶる。爽颯たり。室内の整頓清潔を了へて食事し、直ちに出勤す。途すがら例の如く雑誌學術界を見る。



放課後教材研究會あり。△△隱居や△△少年の爲に多少の氣焰をあげしも、糠に釘なり。張合なくて情なき事夥し。五時終れば日既に没す。怪しき空は風さへ加はりて寒さ俄に嚴し。小使が炊ぎくれたる夕飯をかき込みて〇〇の夜學場に行く。子供二三人來れるのみ。吹きざらしの室に上りて一同の來るをまつ。八時になるも揃はず。來れるものを相手に時事を談ず、今日の研究會より聊か張り合ひあり。九時漸く集まる。火の氣なき吹きさらしの室は耳朶もきるゝばかりなり。十一時すぎ歸途に就く。風寒き事甚し。學校に泊らんかと思ひしも、母のまてるを思ひてつとめて歸る（憧憬下の巻より抄）

私は田舎教員の中にも私のやうなものが決して少くない事と思ふ。私自身の生活は決して輕石ぢやないと信じて居た。然しその輕石のやうな生活をして居る人

の教育が却つて人格的であつて私のやうな教員のやり方は餘程考へものだと云ふ話もある。その何れが好いかは諸君の判斷に任する。△△老人や△△少年は依然として今も尙△△校に教鞭を取つて居る。二十年一日の如しとは此の事だ。只時の代用教員が今准教員と云ふ肩書がついただけである。忠實であると思つて居た私は遂に田舎を去りはては教育界までも去らんとする。知らず諸君はその何れをとらんとするか。

勤續三十年、克ち得たり三千の負債

『あゝ、偉い鱈が下つたなあ』

『下つたばな』



『こらあどうし、え、つささ（長い間）食ふわい』  
 『まあ、上んなはり。今日はお茶んわいとる』

『はい、一寸。忙しかろん抜天（忙しいでせうが）』

村の世話ずきな桂壽さんと母との對話である。然もそれは十二月の卅一日。大晦日と云ふので流石に田舎も忙しい日である。だが然し私の家ではさしたる事もなく、私はぼんやりと失つた戀人の事を考へて此の一年のこし方を偲んで居た。  
 『先生やおんなはるどか』

『はい、居るど。』

『寛さん、居るかい』

『はい』見はてぬ夢を破られた心地で私は臺所に出た。

『や、先生、今日は一寸お願ひがあつて來ましたたい』と前置きして桂壽さんは次のやうな話をした。

藤井先生と云へば此の村でも有名なお方、村に小學校が出來てから三十年の勤續である。初めは校長で中頃は首席、然して今は平訓導である。私の姉も私も、私の妹等も皆この先生の御厄介になつたものだ。先生は初め巡查をして此の村にお出になつたさうだが一度教員として出られてからなかく、熱心に其の仕事に従事された。元より財産があると云ふ譯ではないし、少し許りの土地をかりて桑を植ゑたり、野菜を作つたりして一方ならぬ努力であつた。然し悪い事には先生は一日でも否一時間でも酒の氣がなくては生きて居れないお方であつた。職員室には青土瓶に焼酎が盛つてある。授業がすんで他の教員たちが一服やる時



先生はお茶のみ茶碗で一杯ぐつとやられる。それが次の授業の活力素である。お多分に洩れず子澤山なものだから、十八九圓ではなかくやりきれるものではない。でも長男次男と師範へ入れられた手際は偉いもんだ。と云つたところで何も御自分の力ばかりでもあるまいが。

「先生も、うすくおききなはつたらうが丁度三千圓許りありますもんな」

「え、何がです、何が三千圓？」

「何がつて、そん、借銭たい」

「え、三千圓の借銭？」

「そつて、どぎやんかせにやなあ（どうかして上げなくてはねえ）」

「え、まあ、そら困つたな」私にはどうも慙うも出来たもんではない。が然

し桂壽さんは順々と其のどぎやんかする方法を述べた。桂壽さんの話によると第一講を作つてやること、第二寄附金をつのる事の二つであつた。そして私にも應分の寄附をせよと云ふ事であつた。

このさし迫つた大晦日に、どうして私に寄附金の餘裕があらう。然し私は兄妹五人も先生の御世話になつてる。今私が一人前となつて居るのに、それは知りませんではずませない。

「なる程、そりや困つたなあ」幾ら困つた所で金は一文も出来ぬ。私は決心して財布の底をはいた。お恥し乍らある限りである。そして私は正月早々から來らん年も亦文なしで暮さうと決心した。

桂壽さんが歸つた後で私共は年めしの食卓についた。この瀬戸際に押しつまつ



て人の世話にならなければこの一夜が越せない三十年勤続の老教育家がある事、然もそれが私共自身の先生である事を思ふと何だか一種の戦慄を感ぜずには居られなかつた。一體これは誰の罪か。

酒の罪か。

當局の罪か。

子を産み過ぎた罪か。

それとも本人の意氣地がないのか。

何れにしてもよい、國家は何を以て其の功に報ゐんとするか。世人はこの老教員の末路をどうしようと云ふのか。

最近きく處によると吾藤井先生は勳八等も戴けず恩給百三十圓とかをいたゞい

て永く教育界から引き下られたと云ふ事である。誠にお芽出度いと申し上げたいだ。何だかそれがアイロニーのやうに思はれてならない。ほんとにさうぢやないの？

中折帽はかぶつたけれど

『服装は如何しようか』

『洋服で好いちやないか』

『それでも帽子がいやだね』

『さうか、ぢや帽子だけ中折にしたらどうだね』

さう仕様と議は忽ち一決した。私は友の山邊と共にK市の師範附屬を見に出



かけようと云ふのである。何事にも真面目な彼は何事にもやかましい校長の叱言を恐れて學校には金モール附の正帽で出、中折は風呂敷に包んで来たと言ふ。業がすじと二人は例の輕鐵で西に行つた。

宿について洋服を湯上りに着かへると下女が宿帳をもつて来た。私は金を出して宿に泊るのはこれが初めてである。山邊は宿帳を廣げて筆をとつたが、一寸かいて首を傾けた。そつと目配せするから覗いてみると職業の所をおさへてゐる。

『何とでも好いちやないか』下女に聞えぬように私は云つた。

彼は私の名の上に會社員とし、自分の名の上には技師と書いた。字の讀めない下女はそのまゝ黙つて下りて行つた。二人は顔見合せてくすくすと笑ひ出した。

た。夕飯後二人が散歩から歸ると又下女がやつて来た。

『先生、お床引きませう』と、ことさらに先生が強ひびく。

二人は又顔見合せて苦笑せざるを得なかつた。

翌朝下女を捉へていろくんと語る。

『僕等は何をする者と思ふかね』

『え、先生でせう、先生です』

『どうして？』

『どうしてで、すぐ分りますよ』

『何で分るのか？』

『何となしに先生は分りますよ』



『だつて僕等は先生とは違ふよ。宿帳にも書いてあるやうに』  
それがむしろ不審だと云はぬ許りに改めて二人の顔を見つめて居たが『矢張り先生ですわ』とお櫃を抱へて出て行つた。  
山邊と私とは、その事に就ていろ／＼と研究した。何となれば折角二人が苦心した中折帽も何の甲斐もなかつたから。

教員いろは歌

客あり、教員いろは歌なるものを作れりとして予に示す。曰く  
い／＼くちもなく  
ろ／＼くに勉強もせず

は／＼は黄く  
に／＼はこけ

ほ／＼う骨は尖り  
へ／＼り屈は云へど  
と／＼りどころはなく  
ち／＼から乏しく  
り／＼ここのやうで  
ぬ／＼けた所が多く  
る／＼らう(羸老)して  
を／＼となしくはあれど  
わ／＼けが分らず  
か／＼げでは不平もあり

よ／＼く(慾)もあれど  
た／＼一度も表では云へず  
れ／＼んぎで腹も切れず  
そ／＼つ業以來讀書せぬ故  
つ／＼ぶしはきかず  
ね／＼つはなく  
な／＼まけたく  
ら／＼くもしたく  
む／＼くい(酬)少けれど  
う／＼へをむいては物も云へず



わーしゆく(畏縮)してゐる故  
 のーけ者にされ  
 をーとこらしい所もなく  
 くーらい影を負ひ  
 やーすまる心もなければ  
 まーご子の末までも  
 けーふゐんなどさせじと  
 ふー遇をなげくうちに  
 こーしは曲り  
 えーいやうは不足し

てーん職だなど、  
 あーきらめも出来ず  
 さーき先の事を思へば  
 きーが氣でなく  
 ゆーびをくはえて  
 めーには涙  
 みーじめなる  
 しーよう學教員の姿よ  
 るーん恨骨に徹する  
 ひー痛なる人世の

もーん題を世の  
 せーん覺者に提供して  
 と、『如何だね、うまいだらう』客は予の一讀過をまち兼ねたらしく促す。  
 『なる程、語呂だけは合はせたが、これは小學教員の全般を歌つたのちや無論あ  
 るまい』  
 『ちや先づ君、自身にあてはめて歌つて見給へ』  
 云はれて予は更に一讀した。  
 『失敬な？』口では云つたが、何となく胸に迫るものがある。  
 『當らぬかい。當らずと雖も遠からずだらう？』  
 『俺だけは別だ』

すーり泣けり



「アハ、君か、君は無分別だらう。そして僕は本来云ふと、世の總ての教育者が除外例ならん事を希望する。即ち之れは全く當つて居らない。教員の事を云ふたんぢやないと云ふ事になれば僕は本懐の至りだ」

「ぢや何でこんなもの作つた。俺等を罵倒するのか」

「アハ、怒つたな、怒れ、怒れ、怒れる奴は豪いんだ」

「いや怒るのぢやないが、餘り酷いぢやないか、世には誠に立派な教育者がいくらもあるぞ。人を馬鹿にして！」

「アハハハ」客は飄々として笑つて去る。

某博士曰く「どうも小學校教員に接すると一種嫌な感じがする、何だか恚う扁狹な陰氣なね、一帶あれば何故だらうね。質問の仕振やなんぞも何となくいやだね、磊落な所なんて、ちつともないね」

### 僕の通勤姿

今日は珍らしく安い水廻があつた。  
 久し振で着の衰付にありつけるわい。  
 魚好きの母が喜ぶ事だらう。

◎  
 その頃私は一里を離れたとある田舎町の學校に通つて居た。

これでもどこかハイカラな方だつたと見えて……





二つの理想

(妻)

美しい妻がほしい。眞に美しい妻がほしい。長顔とか圓顔とかそれはどうでも好い。只美しくさへあれば好い。然しより更に欲するものはその心ばえである。顔の美しいやうに、スタイルの優しいやうに、人をして全く我を張らせないやうな美しい優しい女がほしい。深い教育は入らぬ。氣の利いた女であれば足る。不時の際にまごつかぬやうな女でありたい。更に望ましいのは機嫌のよい事だ。病苦に薬を飲んだ苦い顔も、とろりとなるやうな機嫌のよい女ならば外に望みはない。金の足らぬ時、事に敗れた時、總ての失意の時、嫣然として苦しみを忘

れしめるやうな妻がほしい、慾を云へば更に何等かの趣味を解する女で體が丈夫ならば之れ余が理想の妻の上々なるもの。

◎明月を妻と二人の端居かな

(教員)

願はくば理想の教員たらむ。學識に於ては獨學自研、深奥ならずとも該博ならん事を欲す。然も教育と修身の文檢には合格するを要す。徳は一村、否その住める一小部落の人々が眞心より先生と呼ぶに至れば足る。敢て模範小學校、選奨學校たるを欲せぬ。兒童が校を出て、後、専心家業に精勵し然も閑を得ては學校と相往來し、手に巻をすてざるの風あれば可。社會の指導者としては、自ら青年會員となり、校内に一小屋を設け俱樂部を作り、研學娛樂の場とし、以て充實せる



精力を養ひ、老年婦女の會合に出席しては眞文明の眞隨を傳へ、趣味にみてる談話を以て啓蒙開發し以て一郷の風を美化するを得ばよし。

余自身に於ては尙身體の頑健を欲す。然り育英の業と易風の道と讀書とは余が終生の理想にして又娛樂たるなり。

友へ

二年五月二十七日。堀井より來信。只だ簡單に廣島高師に入れりと。感慨多様。直に返事かく。

或る機會を捉へ得たと云ふ自信ありげの葉書を受け取つてから、さて如何するんだらうと毎日待つて居た。そしてまさか高師へとは思はなかつた。今日の葉書に接して誠に云はう様なく胸を騒がした。只單に君の發展を祝すると云ふ純なる

考へのみではない。僕に取つては實に云ふに云はれぬ刺戟と興奮とを與へて貰つた譯だ。僕は如何に君の向上を多様の意味に解したらう。

第一あゝして僕の祝の時にも（私はこの少し前結婚の祝をした）先日市中で逢つた時にも只の一口だつて口外しない——自己の將來に就て——君の意志に驚かされた。

第二妻子ある身として更に高等の教育を受けんとするその態度に働かされた。そして其の裏面に如何許り深い何物か秘められてる事だらうと窺かに其の經過に就て思をめぐらした。

第三菊芳の同人間に於て唯一人の高等教育を受ける君あるを喜ぶ。

が然しそれは皆君を對照としての感想である。僕には更に雜多な感想が去來す



る。幸に此の機を以て思ふまゝに語らしてくれ。

人生は畢竟奮闘の連鎖である。吾々は墓場に至るまで怒力を續けなくてはならぬ。かくてこそ初りて人生に意味があると云ふ考への下にこゝに奮闘の幾年かを經過した。實際僕は過古に於て可なりの努力と奮勵とを續けて來た。然し將來に向つてはより更に多くの希望と抱負とを有する。されば一日だつてもうこれで好いなど、思つた事は無い。

それに過日妻帯して此方、實に二個月間と云ふもの、僕の生は殆んど沈滞と怠慢とで被はれた。耽溺の幾日か、續いた。窈かに自分の主義と希望とを觀じては不安の情に熱涙を吞みつゝ、尙且逸樂の幾日かを續けた。

果然僕の眠はさまされた。只一葉の葉書に。

君は愈々やる。僕も何時まで憊うして居られよう。今年も文檢を受くる豫定だつたのが一寸ばかり耽溺の度が過ぎたり（お恥しい話だが）たつた三圓の受験料が思ふ様にならなかつたりしてね。

ともすれば情に流れんとする僕は常に轆轤不遇にある事が必要である。順境は僕の爲に大に毒である。逆運又逆運とよせては返す世の激浪こそ僕の爲には云ふに云はれぬ藥である。無事平坦は僕をして倦怠せしむる。

君中等教員となる事それ自身には何等の價値もないではないか。小學教員だつて五六十の月收を得る事はなんでも無い。只單に月給を多くとる爲ならば何を好んで供給過多な中等教員などにならう。ね、只現在の境遇に安んずる事が出来ぬ所に何等かの光があるのではないか。



僕の學校の新校長も亦高師出身、未だその如何なる手腕あり、識見ある人だか分らないが、僕としては何だか満足が出来さうにもない。もう今日は資格の時代ぢやない。訓導とか教諭とかレツテル付きて市場に幅を利かさうとするのは愚だ。總てのものが自己の實力以上に效力ある事はない、信頼すべきはその實力のみだ。

有體に白状すれば僕はこのごろ小學教育に興味を失ひつゝある。無形の報酬とか、天職とか、神聖とか云ふ様な負け惜みの、子供だましみたやうな事には髪の毛程も心は働かなくなつた。若し一生小學教育に身を捧ぐるならば僕はこゝに深甚なる教育の知識と、徹底した人生哲學の識見が入る。それが無い間は僕の教員生活は浮草の様なものだ。僕は幾度か政治家、外交家乃至は操觚社會に身を投

じたいと思ふ事がある。僕が若し教鞭を棄てる事があつたらそれらの何れかに向つた時だらう。

意氣地なくして徒にいちげ根性の多い教員にはもう飽々とした。眠つたやうな、死んだやうな人は蟲から嫌ひである。それらの人々の間に相伍して貴重な青春の月日を送つて行く僕には少からの努力が必要である。君よ、僕は斷然生活の歩調をかへよう。そして新建設の足音高く其の第一歩を踏み出さう。折々は鞭撻の勞を惜む勿れ、友よ。

恚うかいたが、何故か私はこの手紙を日記の中に巻込んで了つて、友には葉書を出したと書いて居る。然して其の葉書の末筆に『好漢、幸に自重せよ』てな文句を書いて、友の怒りを買つた事も覺えて居る。私は未だに其の意味が分ら



ないで居るのである。

結 婚

讀者は何時の間にか私が結婚して居た事にお氣づきであらう。私の結婚には又格別な話がある。すまないが少し許り惚氣を聞いて戴きませう。近代人の洗禮を受けた私は酒にも酔へず、身も心も忘るゝ様な戀も出来なかつた事は勿論である。友だちとして可なり親しい交りを結んだ女教師も可なりあつたが、さて愈々本物の戀が出来たかと云ふと大抵は物にならない。戀の奥には慾があり、物質の眼が輝いて居た。まだうら若い青年のくせに、始終處帶じみた事ばかり考へて居て純な心地で戀する事などとも私には出来なかつた。その

癖私にはよく女の話をした。妻の事を語つた。母も亦まじめに話した。大抵の場合私には母の説に賛成であつた。然して私自身の一大事である此の問題に就いても亦、全く母と同じ意見であつた。と云ふのは是非女子師範出の女をめとつて共稼をする事によつて此の苦しみを緩和しようと思つた。だからそこに美しい戀のあらう筈はない。或は突然、林藏君が私の内を訪れての話に『よい嫁さんがあるから貰つておかぬか』と云ふ。貰つておかぬかもおかしいと思つてだん／＼聞いて見ると。その女は今現に女子師範の四年生であるが、その兩親一家族が遠く米國に渡る事になつた。そこで只一人後に残ると云ふのである。それがその親たちにとつては非常な心配なので、どこか然るべき立派な人があつたならば縁づけて行きたいと云



ふ望みである。だから今すぐと云ふ譯には行かぬが、『貰つておけば好い』と云ふのであつた。

なる程それは面白い話である。都合によつては御世話になりませう位の返事で其の日は別れたが。私は其の足を以て直ちにその女の身元や学校の成績乃至は容貌に至るまでの調査をすゝめたが、これは又願つたり叶つたりで、私の希望にも母の望みにも、きつちりと當はまつた女、然も一人前の器量も備へてると云ふので、事は容易にきまつた。

扱愈々結納でもと云ふ段取にまでなつた頃俄然問題は破れた。思ひがけなくも先方から謝絶して來たのである、さて如何云ふ譯であらうと密かに調査の歩をすゝめて見ると、これは又怪しからぬ。中にはいつて一寸引かき廻した悪戯者があ

つた。私はその事實の詳細について述べべく未だに時を得ない。

困つた事に思ひつゝも或日曜日、私は同じ女子師範にある私の妹を訪ねた。どこにもさうだが女の學校には面會簿と云ふものがある。私とその面會簿に記入しようとする、はつと眼についたのは、すぐその前にかいてある文字である。あらう事か其れは問題の女に逢ふ可く、その母親が來て居たのである。私の胸は俄に早鐘をつき出した、いろ／＼と取り調べはしたもの、本物のそれを見るのは今が初めてである。然も事件は今や斷崖の絶頂に立つて居る。間一髪に事は破れる。否私の望みは正に絶たれて居るのである。

應接室に行つてみると果して一人の母親らしい人がある。卑しからぬ人品に私は先づ胸の騒ぎの彌増すを覺えた。『これがこの人が彼女の母親だなあ』と思



へば、茲で逢ふたは何かの因縁、所詮黙つて別る、譯には行かぬ。私の足は知らずにその母親の近くにすゝんだ。だが然し胸は更に高鳴つた。云はうか、云ふまいか、絶好のチャンスではあるがさて何と云ふ？此の時の私の様子は慥に違つて居たであらう。母親も少し變だと見られたと見えて。怪訝に私の方に注視される。益々きまりが悪くなつた。が却つてそれに激勵されて遂に私は口を切つた。

『失禮ですが齋田さんでは御座いませんか』

『はい』

『あ、さうですか實は只今面會簿を見ましたので』

『そしてあなたは』

『私、私は、あの、先日來林藏氏の方からお願ひに出ました、△△で』  
向ふの顔にさつと暗い影がさした。失策つたと私は心の奥で叫んだ、あの顔の表情こそはまさに失敗の徴象であると。

『あ、さうですか』と冷かな一語。

『實はお話が少しおかしいと思つて居る處なんです、一帯どんな譯でせう、』

私は……

すつすつと軽く上草履の音がした、私がかぶり返つた瞬間、應接室の入り口に立つて私の方を見詰めてぼんやりと立つて居た女の表情こそは、實に私が初めてみた彼女の顔で、今だに鮮かに私の印象として残つて居る。あ、きつと口をしめて心も下をうつむいたあの表情。



『では何れ又』と母親が立ち上がられると、入れ違ひに私の妹が来た。  
『おや、兄さん！』包みきれぬ嬉しさを表はした妹の聲、その聲がまた彼女に如何に強いひびきを與へたか。

『あの方、△△さんなの？』彼女はその母親に叫んで居た。

私は妹と二人で暫く話した。彼女も亦母親と二人で廊下で暫く立ち話をして居た。そして二人共夫れく々に別れて了つた。

其日表に表はれた事實と云ふのはそれまでである。然し私の心にも彼女の心にも可なり複雑な作用が營まれた事だけは事實であつた。私はその間の消息を詳しく物したいと思ふが、聊か問題が脱線するからそれは不日本書の姉妹篇として事はす私の自叙傳が物語るであらう。

彼女、それは名をM子と云ひ、今現に私の爲に共稼の苦しみをなめつゝある私の細君である。

◎ばらの香をよしと云ふ人一人得て端居のくれの淋しくもあらず

(松 濤)

◎ばらの花ほのかに匂ふ夕ぐれは歌よむ妻をほしと思ひし

(天 壘)

美しきは醜きに勝る。然れども装へるは天真流露せる自然のまゝなるに如かず。自然の嘆美者は厚化粧の女を喜ばず。むしろ素顔の美を愛す。春の濃なるを欲せずして秋の瀟洒なるを好む。

共稼の經驗

月俸十八圓にて一家を支持す 卒業したのは二十二の年で俸給が十八圓。それで一家五人の口を糊して行かうと云ふのだから並大抵の苦心ではなかつた。



幸さいはひ近くの學校がくかうに奉職ほうしやくが出来たので通勤つうきんして居たから、どれ位助たすかつたかも知れない。別に之これと云ふ収入しゅうにふはなかつたが母ははが娘むすめ子ごに裁縫さいほうを教おしへると云ふ處ところから野菜やさい物ものとか粉類こなるとか云ふものは不自由ふじゆうない位くらい貫ぬつて居た。それでどうやら慙かなうやら切きり廻まして行いつて居たが、さて夏休かつやすみになつて講習會かうしよくかいに行いきたいの、冬ふゆ近ちかくなつて洋服やうふくを作つくらねばならんの（それまで僕は在學時代ざいがくじだいですまして居た）と云ふ日ひになると、それは一通りひととはや二通りふたとはの苦心くしんではなかつた。然しとやかくやりくつては來た。

結婚談持上けつこんだんもちあがる 此この急場きよばを救すくふ爲ためには師範出しはんいでの女をんなを迎むかへて共稼ともがせをするに限かぎると母ははが眞先まつききに結婚けつこんを進すすめた。元來むづかし餘あまり木強ぼくぢやうな男おとこでもない癖くせに頑張がんばつて居ゐて失敗しつぱいでもする事ことがあつては一大事だいじ、適當てきとうなのがありさへすればと返事へんじをした。それから心こころ當あたりを探さがし初はじめた。

心當こゝろあたりはいくらもあつた。然し素寒貧すかんびんの上うへに小姑澤山こじよざくさん、おまけに矢笠やかまし屋やの姑しよごと來きて居ゐるから、除程よほど僕ぼく自身じしんが勝かれた者ものでない限りかぎは一寸ちよつと來きて呉くれる者ものは少すくないだらうと、うんと謙遜けんせんして容易よういに矢やを放はなつ事ことは出来できなかつた。

その頃ころ僕は非常ひじょうな奮闘ふんとう的生活せいかうを續つけて居た。逆境ぎやくきやうと戰たたかうて勤勉きんべん怠たらず、近ちかく文ぶん檢けんに克かち得えんと抱負ほうふもあつた。此この積極せききよく的な態度たいどと奮闘ふんとうの結果けつぐわとは若い女教師ぢよけうし連れんの心こころをそつたらしい、それとなく謎めいのやうな話はなしを聞きく事ことさへあつた。然し事こと實じつは中々なかなか容易よういでない。第一だい當方たうほうから要求えうきゆうする女をんなは先方せんほうの都合がふが悪わるいし、向むかふから望のぞんで來きると云ふのになるとこちらでおあいにく様さまだし、願ねがつたりかなつたりと云ふのは滅多めつたにあるものではない。たま〜雙方さうほうの意志いしが一致いちじしても親類しんるいの者ものが



僅か小學教員位ではなど、いふ處に口を出して中々成立するものでない。

一體その頃の女子師範出の女は、除りに氣位が高かつた。せめて中等教員位にはと皆望んで居る。然し御自身は大抵お多福と來てるから、中々さう許りは行かん。其中に賣れ残つて四年五年とたつ中には、小學教員はおろか車引きにでもとまでは行かぬか知れぬが、主席であつても否准訓導でもと云ふやうになる。でその頃のを睨むと大抵思ふ様に行く者であるが、一つ我慢しなくてはならぬのは容貌である。師範卒業生の美人を求めると云ふ事は、中々容易の事ではない。

愈々結婚—共稼生活に入る 卒業の第四年目、僕の年が二十五、俸給が二十四圓、貯金は一文もない。(最も二十圓位はあつたが皆結婚の費用に入つて了つたから) 選び當てたのが其年卒業の女で、年齢は二十一年、俸給は十四圓、幸に容

貌も可なりであつた。

愈々共稼生活は開始された。其前に當つて十分自分の貧乏な事や、一家の爲に犠牲になるつもりでなくては來て呉れるな、と云ふ事まで申し入れてあつたので花嫁もそこ／＼から首も廻らぬと云ふ有様。

歸宅しても妻は居らぬ その妻は、一里離れた學校に通勤して居た。今の小學校と云ふものは、それは想像にならぬ程忙しい。僅かハタ、タコを教へるのに男一人が睡眠時間までも減さなくてはならぬ位である。随分と馬鹿氣た事も多いものだ。やれ何會議だ、やれ何の研究會だと、殆んど毎日のやうにあるから、やりきれない。

一日の奮闘を終へて歸る 元より玄關に迎ふ可き筈の妻の影はまだ見えない。



母はブツブツ云ひ乍ら夕飯をすます、日は暮れる。弟等が提灯をつけて迎に行く。時とすると一里すつかり任地の學校まで迎に行く事も珍らしくない。綿のやうに疲れ切つて歸る。可愛さうとは思ふけれど夫の方から御機嫌如何にとしなだれる譯にも行かんし。暗い所で冷たくなつた御飯をかき込んで居る彼女の後姿を見ては、ため息つく事さへあつた、それから後仕舞をする、そして湯に入る。やつと自分の體になるともう十時だ。雑誌一頁讀む隙さへない。朝は一番に起きななくてはならぬ。若いだけに髪結ひや何かにも相當の時間はとれる、矢笠しくは云ふものゝ母でも居つてくれ、ばこそ出来るもの、これが二人ぎりであつたなら並大抵な苦心ではない。最も若夫婦二人ぎりでどこかに間がりでもして行くのなら兎に角、細くとも一家を立て、行く上から見ると中々仕事は多い。

妊娠—流産—校長の不機嫌 その中に妊娠する。さあ愈々一里の通勤が問題となつた、幾度か校長や視學に頼んでも轉任が出来ない。袖の下でもうんと奮發したらよかつたらうと思ふけれどそんな事の出来ぬたちの男だから眞向から交渉する、とうとう轉任が出来ぬ車の通ふ半道だけは車に乗らす事も多かつたが、それは中々容易な事ではない。遂に七ヶ月にして半産して、可愛い子は死んで了ふ。産後の缺勤一個月に及ぶ、出勤して見ると受持の児童はさんざん、それに校長や同僚の會釋は甚だ悪い。それが動機で一人者にされる、再び轉任を僕に迫ると云ふ風で、なか／＼氣苦勞するものである。

事多く豫期に反す 定めしよからうと思ひつめて居た經濟も、左程好いものではない。少しくつろいで來たと思ふと費用が増して來る。十八圓時代も三十八圓



時代のこの頃も殆んど餘裕はない。

皆が皆憚んな風ではあるまい。然し随分と此に似た事情の人は多い事と思ふ。然もこんな事は、外部から見ても分るものではない。夫も婦も乃至家人も、すべてこれが爲に氣拙い思をしなくてはならぬ。氣短い僕は何の罪もない妻を離別して了はうかと思つた事さへある。

今年は成婚後早や四年目である。二人の収入を合する時は五十圓近くなる。然し轉任問題にやけて、今では二人共市部に出て居る。この爲通勤の道は近いが、仕事は益々多い。それに子供がある。守りの婆やが入る。乳を飲ませに學校に連れて来るさへ好い面一つして呉れる人はない。心配は依然たるものである。母は老いる。家事は殖える。女一人で學校のつとめ、家の仕事、夫の世話、子供の教

育、ととてもとても出来るものではない。

殊に子供の將來を思ふと、僅かばかりの俸給にひかされて學校になど出すものではない。女としては子供を育てると云ふ事が何よりの仕事である。眞に子供の將來を考ふるならば少し位の難儀を忍んでも、自らついて居て教育しなくては駄目と思ふ。

利點も慥にある 以上僕は自分の經驗からして比較的辛かつた處を云つた勿論利點も慥にある。夫の仕事に對して妻が正しい理解をもつ事や。互に教育談をして楽しむ事や、經濟上の利點など數へたらだいたいふんあるだらう。殊に僕は、妻の激勵によつて相當の勉強も出來た。人は妻帯すると勉強が出來ぬやうになるなど、云ふけれども、そんな事はない。妻帯して勉強出來ん位ならば學者は悉く一生



獨身で居らなくてはならぬ事になる譯だ。こんな事があつてたまるものではない。

女教員制度改正の必要

最後に僕は如上の短所を救済する法を述べて見たい。その根本は女教員制度の改正にあると思ふ。大した事もないのに女教師を日暮までも引張つて置く必要はない。否一歩進んで女教師の勤務を午前若しくは午後だけにし（俸給などは餘り高くなくても好いから）公私兩方の務めは立派に果さしたいと思ふ。その事が出来ぬならば校長や其の他の教員に、今少し有夫の女教師に對して同情をもたせる事だ。今のやうに同情などは藥にしたくともないやうな状態では全くやり切れないと思ふ。

未婚者諸君に告ぐ

更に近く妻帯せんと欲する人に其の選擇の標準を一言した

three heart  
blow my head

い。曰く第一健康、第二愛嬌、第三氣轉之れ。此の三要素を備へたる女師卒業者なれば、共稼ぎをやつても先づ大抵は都合よく行くと思ふ。然も決して永く教員させるものではない。子供の二人も三人も出来てからまで妻をきたふのは慘酷も亦甚しい。共稼は一時の經濟策にしたいと思ふ。（五、九、教育界）

共稼の爲に世界が狭くなる

中橋文相は教員の家族に副業を奨励して居らるゝ。一面産業を奨励すると共に、勤勞の風習を養ひ、兼て教員生活の窮迫から幾分なりと離脱さしてやらうとの御好意は實に深謝に値する。私は思ふ。教員の家族がやる内職としては、（むしろ公職である）が共稼即ち二人が私共のやうに教員するに越した事はない



女がいくら外の仕事をしたからとて、とても教員給だけにはあり付き得ない。  
 だが然しそれには男にも女にも非常な努力が入る。飯は女が炊くものなど、相場をきめて居てはいけない。細君だつて日が暮れなければ歸らぬ事はいくらもある。歸るまでなど、云つて居ては眼が凹み入つて了ふ。仕方なく自ら流し場に行りる、長い間には何とか炊事の仕方一通り心得る様になるものだ。さて愈々出来上つた御飯を夫れに用意してると、疲れ切つた細君が、氣の毒さうにして歸つて来る。

『お歸りなさい。お疲れ』

男が玄關に出迎へる。何の事はないやうだが、日本式の長い因習に育つた吾々としては聊か努力を要する。かつてへなぶり子がへなぶれるに『妻も亦十五圓に

して共稼ぎ、たまには起きて飯たけと云ふ』と。

朝起きて炊く事は滅多になからうけれども、後の仕舞から、自分の身仕舞まで随分と忙しい女の様子を見ては、中々さう朝寝もして居られない。矢張り餉臺をもち出す位の事はしてやらなくてはならない。此れ等の事實を馬鹿くさいと思つたり、或は又人に對してはづかしいと思つたり、人々も亦之れを笑つたり蔑んだりする様な現在日本の状態では決して樂なものではない、況んや細君自身の苦勞苦辛と云つたらとても並大抵のものではない。學校に對し、家族に對し思ふ通りの勤めが出来ぬところからして神経は苛々して来る。始終こせこせして居て落ち付いた日もないと云ふ有様、わけて日曜などの「忙しさ」と來たらお話にならない。當り前なら日曜は朝寝と相場もさまつて居るが、恚う共稼ぎなどしてると中々



さうは行かぬ。早起して洗濯にかゝる。整理をする。お針をとる。それでも中々思ふ様には洗ひすぎも出来ぬものである。雨の日曜などに出つくはすと、細君眼に涙を浮べる事すらある。

それなどはまだ、我慢が出来るが早や臨月に近い大きなお腹を抱へて一里も通勤すると云ふ事になつて来たなら、それこそ悲惨の極みだ。大抵の縣では出産の前後六十日は休めるやうになつてゐるが。餘程押し強い人でない限りはさうは休めない。私等では大抵出産の前々日位までは出勤して居た。それに此の頃の校長など云ふ人々は全く同情がないのだから、そんな事などに對しては極めて冷淡なものである。学校の成績を上げようと、何もかも打ち忘れて居る校長ときたら些の用捨もない。若し此の間に於ける細君の勤め振が悪いと云ふ事になると、單に

その本人が苛めらるゝのみならず、延いては主人にまでも累を及ぼす事は少くない。『あれは主人があゝさせるのだ』憚うした邪推からして頻りに夫の方を悪く云ふ。爲に男としては折角築き上げた教育界に於ける信用を思ひがけなくも一朝にして失墜して了ふ事がある。かくて十年の親交ある友に對しても氣拙い思ひをし

たり、はては絶交したりしなくてはならぬ事すらある。こんな事實は私自身の経験にもあるし、又私の朋友の間にもあつた。『共稼して爲に世界が狭くなる』私は憚うした感じを抱く事が多かつた。此の事實に就ては切に世の校長連の反省を促したいと思ふ。

動 搖



村の學校の首席訓導は三年目に組合立高等小學校の平訓導に轉任した、そこには農業補習學校が併置されて居た爲に私は其の方へも關係した。後には其の學校が乙種の農學校と上昇したので私はその教諭と云ふ事になつた。

「おめでたう、教諭さん」などと友達から云はるゝと私は多少の満足を感じた。其の頃の私共の頭には教諭と云ふ名が多少の誇りを有つて居た。

「君は何時合格つたのかい」私が文檢を志てるると云ふのでこんな彌次を云ふものもあつた。

「ほんたうの教諭さんまで是非やつつけなさい」との前任學校の校長の挨拶は私にとつて少からず不快を感じしめた。

「何糞つ、今に見ろ」と力まぎすには居られなかつた。

幸其の學校は私の勉強には都合がよかつた。此れまでのやうに全校の經營を一身に引き受けると云ふ様な事もなくも只自分の學級さへよくやつて行けば日日の務めはすむのであつたから私は思ふ存分仕事にかゝる事が出来た。同僚の者は業がすむと宿直室に寝ころんで碁を打つたり、或時は又團子を拵へたりした。

一週に一度位は屹度阿彌陀籤と云ふものがあつた。例のT君が紙片をまるめて硯箱の蓋に入れたのを持ち廻る。それを一つづつ取つては開いて見るのである。中には最高十錢から最低一錢までの金高が書いてあつて、各引き當た金を出さなくてはならぬ。そしてその金で焼芋を買つてたべ、たまには饅頭などを奮發する事もあつた。冬になるとよく「馬肉會」と云ふものをやつた。その頃馬肉一斤が十六錢であつたと記憶してゐる。一人宛半斤あれば澤山だから大抵は十二三錢宛



出し合つて、しこたま馬肉を買ひ込んで校園の野菜を徴發して平げた。さう云ふ時にはきまつて校長連の批評が出た。女教員の棚下しが出た。秋の祭りは此人たちにとつて此上もない樂みの一つであつた。數へきれない程の招待が来る中から、豫て教育に熱心な内を飲んで歩くのである。何しろ一日の中に十數軒を務めようと云ふのであるから中々樂な事ぢやない。業がすむと間もなく勢揃ひをする。萬事は指揮役たるT君の合圖に任する。中には吸物一つとるかどらぬで引き上げたりしなければならぬ宅もある。門をはいるなり『若しもし龜よ、龜さんよ』など、大聲を出して合唱し乍ら躍り込む内もある。漸く油がつてメートルを上げてると引き上げの合圖があつたりする。家人に取つゝかまつたり、居残つたりして一行にはぐれるのを沈没と稱した。七軒八軒と多くなるに

つれて沈没や脱線が多くなつて流石に最終までの任務を完うする猛者は少かつた。日頃濃厚なD先生なども好い加減赤い顔して町中を『トテトテト』など、喇叭の節を歌ひ乍ら歩かれたりした。恚うした呑氣な生活の中に浸つて若い青年の日を過すと云ふ事は私に取つては一方ならぬ苦痛であり、淋しみであつた。私は毎日の如く自分自らを鞭撻した。けれども遂に私は其の學校の生活を呪ふ様になつて了つた。何とかして今少し緊張した生活がしたい。否自分自身ではともかくも、もつと張合のある環境の中に住みたいと云ふ心がむら／＼と頭をもたげるのであつた。其の頃の日誌老んとする生はよくその消息を物語る。

十一月十二日。木、晴



常に念頭にあるものは向上也。努力也。然も思ふ程それ程向上も出来ず、努力も出来ず。衷心淋しからざるを得ず。意志の弱きか、生の緊張なきか、鞭うてども進まざるの恨あり。

平々凡々。其日ぐらしの人々と生を共にする事、此れ吞氣はのんきなれども到底吾の堪へ能はざるところ。吾はその爲に取り返しのかぬ損失を續けつゝあるなり。

讀書。近代教育思想史。

十一月十三日、金、晴

現在の我が生活は實に空虚なり。學校の仕事は遊半分なり。家庭にはさしたる和樂もなく團欒もなし。然して又向上の一路に全力を傾倒せるにも非ず。一も取

らず二も取らず。誠につまらぬ生活なり。むしろ村夫子然として一生を終らんにはと思へども何の因果か左様もあきらめられず。かくて悶々の幾日を重ねぬ。

讀書。思想史及學術講義。

十一月二十二日、日、晴

月末の計算をなしてみれば實に五十四圓の支出をなさざる可らず。収入四十一圓を以てして尙十數圓の不足あり。思うて茲に至れば殆んど何事もなす氣になれず。机に向ふも徒然たり。

妹歸る。餘り嬉しくもなし。特に變りたる心地もせず。女子師範の教育が根本に於て誤れる事などを語り、自らの修研を戒む。

讀書。思想史、生立ちの記。人格と教育。——日記老いんとする生より——



局面の展開。これより外に私の取る可き道はなかつた。  
 勉強も思ふに任せぬ。金は足らぬ。心は荒む。あゝ心は荒む。  
 平和な天地。長閑な自然。純樸な里人の心。私はそれらの總てを棄てようと  
 決心した。あゝ五年住み馴れたる亦樂村舎。私はその村舎の主として一生を終る  
 可く未だ餘りに年が若かつた。

スリーピング、ホーム

私は三年の間一里の道を田舎町の學校へ通うた。然も後の一年は一家四人の者  
 が往つたり來たりした。と云ふのは私等夫婦と子守に子供此の四人である。四人

が揃うて家を出て、畑道を通り、町へと急ぐ様は慥に一つの奇觀であつたに相違  
 ない。と云つて轉任はさせて呉れぬし、下宿をしたりするだけの餘裕もないし、  
 口善悪なき田舎の若者等に好ましかる話の種子を興へつゝも依然としてそれを  
 續けた。その頃の學校の仕事と云ふものが又馬鹿に多いもので四人は日くれて歸  
 る事が多かつた。そのために家とは只だ名のみ、全くスリーピング、ホームであ  
 る。然もそれが、冷たき冷たきスリーピング、ホームであつた。  
 それかあらぬか、その時の子供、即ち私の長男は生後百日にして死んで了つ  
 た。元來私は家庭生活の憧憬者であり、家庭改良論者である所からして、この様  
 な殺風景な家庭生活が又なく苦しかつた。何とかして今少し暖味のある生活が  
 してみたいとは私の切なる望みであつた。眠りに歸る家、私はその家にも飽



いて来た。學校も家庭も、精神にも、物質にも、私の生活は改造されねばならなくなつた。

進むか？

退くか？

私は考へた。この改造の道は只だ二つある。積極的に進むか、はた又消極的に引き込んで了ふか、あきらめ的な隠遁者流の生活をするか、所謂子子者流と相伍して、のんきな生活を送つて行かうか。或はそれが氣樂で、私のやうな體の弱者にとつては却つて長生の基であるかも知れぬ。(とほんの瞬間だけ考へた)然し乍ら既に業に私のこれまでの敘述が説明してる様に私は消極的な男ではなかつた。

展開！ 發展！ 行かう、斷然私は生れ故郷、然も建設日向淺き村舎をすて、塵の都へ光の巷へ！

この日ごろわが思ふこと一つあり

思ふがまゝに本を讀むこと



# 中 師範教員物語

## 都會への第一歩

行き詰つた途は何處かに開かれねばならぬ、若しそのまゝで終る事があつたならばまさしく死である。研究にも金にも私わたくしの生活は行き詰つて了つた。精神的にも物質的にも私わたくしは展開を計らねばならぬ。展開の道は數多あるのではない。「新聞記者にでもなろうか」慚あはうした考かんがが幾度か湧いて來た。師範時代の文藝愛好仲間の二三が操觚社會に出て多少の成功を收めつゝあると云ふ事實が私わたくしに

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the title "中 師範教員物語" and the chapter title "都會への第一歩".)



愆うした考へを起させるのであつた。

『つまらぬ。田舎記者になつてどうしよう』愆う呷き返すものがあつた。

『矢張り俺の行く道は教員かな』愆う決着がつく迄には多少の時間を要するものであつた。それにしても田舎教員にはもうあき／＼した。まるで死人のやうな生活にはあき／＼した。私は何とかしなければならぬ。

其頃私はずつかり天狗になりきつて居た。所謂研究部會と稱する八九校の職員團體の中で、自分より偉い人は一人もないと自ら思つて居た。従つて私の態度は聊か傲慢で生意氣であつた。私は私自身の此の態度がつくづく嫌であつた。『何て高慢ちきな奴だらう』愆う自ら戒め乍ら、さて自分ではどうともそれにならなかつた。

『誰かうんと頭を押しつけて呉るゝ人はないかなあ』あたりを見廻した所でさてそんな人もなささうである。角力が關取にぶつつかる様に幾度とびついて行つてもはね飛ばし、はね飛ばされても幾度か飛びついて行くやうな趣がほしい。『俺をうんとはねとばして呉るゝ人はないかなあ』

愆うした心の悶えが私をしてとうとう師範訓導にまで導いた。その頃K市に第二師範と云ふのが新設され、來年から新に附屬小學が開設される事になつた。校長はT文學士、教頭も亦文學士、外にも學士があり、主事は廣島出のちやきちやきだと云ふので私は何だかそこに行つて見たくなつた。行つて少し頭を叩かれて見たくなつた。

私が日頃毛嫌ひして居た師範訓導をば自分自身が務むる様にまでなつた事に



就ては以上の私の考へが十分に説明したと思ふ。  
五年間住み馴れた亦樂村舎を後にし、純真な村人の同情を無にし、いやがる母をすゝめ立て、私は都會への第一歩を踏み出した。  
私は果して、ここに安心し得たであらうか？

出世策

『や、お目出度う』

『お目出度う』山川、内田の兩君が喜びに來た。二人共在學時代の文藝同好者で、今はK市の青年教育家として相當な地位に納まつて居る。

『何がお目出度いかい。止むを得ぬ窮策にすぎぬたい』

初夏の室内は可なりに暑かつた。三人は細君手料理の寒酒團子を頬張り乍ら語る。

『好いちやないか、師範の訓導さんだもん、これからうんと出世するさ』

『どうしたら出世が出来るかい』

『それを僕にきいて如何する。僕のやうな出世のしそこなひに聞いた處で駄目ぢやないか』

『ハ、、、』

『だが然し、僕にも其の方法が分らぬのぢやない』

『そら見給へ、ちやんと知つてるぢやないか、一つきかしてほしいもんだ』と私が山をかけると、山川はやゝ黄くなつた眼玉を光らして語る。



『先づ第一に辭を低うし、禮を厚うする事だよ、おべつかを云つてお鬚の塵さへ拂つて居たら譯はないよ。』

『そんな容易な事だつたら何故實行せんかね』

『いや、これからやるさ、此から大いに之を學ぶつもりだ。教授だの訓練だの、あれは好い加減なもんさ、マスターの氣に入るやうにさへして居ればね、——左様此れが僕の新出世策だ』

『苦心慘澹して十ばかりも阿諛つておいて、少しとり入つたかと思ふとひよつと一つ逆らふ。何の事はない、凡例の功を一簣に缺くと云ふ譯だね、そんな事は吾々によくある事だ』と内田君が云ふ。

實際山川君も内田君もおべつかの云へぬ人である。それだけ又二人共實力程に

は重用されず、多少不快の日を送つて居た、然して私自身亦その一味の者である事を思つて聊か苦笑を禁じ得なかつた。

辨當屋

『君、僕は參觀人の中食辨當を引き受けようと思ふがね』W君は突然私に話しかけた。

『賛成だ。そりや好い、第一參觀人にとつても如何程便利かも知れない。あんな拙い奴に三十錢も四十錢も出しちやたまつたもんぢやない』

『實際僕も可なりなマイナスがあるのでね、此度だつて出て來るに就ては相當入つたからね。何とかして少し緩和しなくちや』



「御同様御多分に洩れぬ方だ。恚うして行きや何時か首も廻らなくなるさ」

「教員内職奨励會でも起すか僕が幹事長になつても好いが」

「駄目駄目、一帯今頃の教員、

敢て教員のみに限つた事でもあるまいが

は街氣が多くてね、苦心慘澹四苦八苦の中にあつて辛い生活をして居乍らも、表

にはさも偉らさうな金持でもありさうな風に見せかゝるものが多いからぬ」

「貧乏は人の恥だらうかね」

「まさか？ 怠慢こそ人の恥だよ」

「でも何だか恥しい氣もするね、實行となると一寸分別するよ」

それから二人は辨當屋開業に就て凡そ幾千の資本を要すべきかなどに就て可なり研究した。相當熟した上でW君は校長にも打ち合せしてみようと云つて居た

が、どうした成り行きになつたか、遂に實行に至らずしてすんだ。私はその理由を今だに考へ出せない。

文部省訓令第七號

北海道廳 府縣

戦後經營ノ方策トシテ國民生活ノ充實ト國富ノ増殖ヲ圖ルコトハ今日最モ緊要トスルトコロデアアル。固ヨリコレハ容易ナ業デナイカラ。國民ハ此ノ際非常ナ決心ヲ以テ之ニ當ラナケレバナラヌ。即チ徒ニ勤勞ヲ賤シミ漫ニ徒食ヲ誇ルガ如キ舊來ノ陋習ハ斷シテ之ヲ打破シ、更ニ進ンテ大ニ業務ヲ勵ミ家産ヲ治メル一大覺悟ヲ要スルノデアアル。教育ノ任ニ當ル者ハ單ニ學校ニ於テ此ノ趣意ヲ生徒兒童ニ教フルニ止ラズ、延テ弘ク之ヲ社會ニ勸メ、尙事情ノ許ス限り其ノ家族ヲシテ適當ナ副業ニ従事サセルコトハ實ニ勤勞ヲ尙ブノ美風ヲ作興スルモノデアツテ、又前述ノ方策ニ適應スル所以デアアル。地方長官ハ此ノ訓令ノ趣意ヲ心得、善ク地方ノ實情ニ鑒ミテ、夫々適宜ノ措置ヲ取ラレルコトヲ希望スル。

大正八年八月六日

文部大臣 中橋徳五郎



右の訓令は世人の氣憶に新なる處である。それに就て文相中橋氏は次の様な話を  
して居られる。

「近來安逸華美を尊ぶ結果勞働を賤しむの風甚しく、官吏學校教員等の家庭でさへ奥様と云ふ者は何  
もせずに遊んで暮すのが偉いやうに思ひ做されて居るらしいが之は畢竟封建時代の士風が今日に迄齎した  
舊い陋習で現代に適應しない事甚しいものである私の持論は勞働は神聖なり人は働かねばならぬもので  
あると言ふ事にある私は今回この立場に立つて先づ教育の任にある人々の間から此主義を宣傳して其家  
庭に實行せしめ一面現在の生活難に對して多少の補ひとすると共に他面大に舊來の惡風を打破せんとす  
る希望である其處で從來官吏には官吏の服務規律があつて其家族は商賣や副業をしてはならぬ事となつ  
て居るが之は甚だ現代に適應しないもので早晚改正される事となつて居るから文部省は先づ之が先驅として  
副業をしても可いと公に訓令するのである故に訓令の趣旨は主として比較的廉い月給に生活して居る人  
人即ち中小學校教員の家族に實行して貰ひたいので現に大阪神戸名古屋等經濟方面の發達した都市の中  
小學校教員は其大半が内密に副業をやつて居る程であるから是からは公にやつてもつと發達させたいので

ある地方では小學校の先生の奥様が田の草取りに雇はれたり養蠶の手傳をする、「先生の奥様があんな事  
をする」と云つて卑しむ風があるが將來はかう云ふ事のないやうに何處の地方でも勤勞は美徳であると考  
へる様にしたものである唯都會では家庭副業と云つても仕事が少ない恐れがあるが之は其地方長官等の  
盡力で何とか支給の方法を講じて貰ひたいものである」

次の一文は八月九日の報知新聞に發表されたもので、右の文相の話に對する反  
響である。より以上私は何事も附加する事はない。教員と云ふものは如何なる  
考へ方をして居るかをみて貰へば好い。

文相に上る

文部大臣閣下、教員内職獎勵の訓令を下し給はり、雖有奉存候、就ては閣下の令夫人及び地方長  
官の夫人方にも舊來の陋習を打破し國富増殖の爲且勤勞を尙ぶ美風を作興する爲に、何ぞの内職をなさ  
れて其範を垂れさせ給ふ事と奉存候、若し閣下の令夫人等は閣下等が多額の俸給を得られ候爲其必



要なしとならば、寧ろ教員には「國家教員を待遇するに安全に其家族を養ひ得るだけの俸給を與ふるを得ざれば、各自に内職を勉めて自立を圖るべし」と直裁簡明に御諭しの方、却て「國富増殖、陋習打破、美風作興」一杯の鍍金の美言よりも實際に效果可有之存せられ候、又内職の種類に就て、田の草取の雇入と御示し被下誠に痛み入候、押付けがましく候得共其閣下夫人にも何卒田草取の雇人とならせられ、労働は神聖にして備者尊く披備者卑しきにあらざるお手本をお示し被下度然らざれば世は益々拜金宗に墮りて、當さへ社會より侮蔑せられ候、教員の權威は全然滅却に至るべく候、至囁々々

教員でも生きて行ける（友人の話）

土を食ひ水を飲んででも生きて行けぬ事はない。私等に米は食ふななど、今更お仰せになるのはおかしい。私共は正月かお祝儀かより外に米ばかりの御飯をいをい事はない。二重生活をさくる爲に和服を許して下さるさうですね。

これは私共にとつては何にもならぬ話です。私共の洋服は全く労働服ですからあれで内へ歸つてから畑も打ちますれば、桑刈りにも行きます、和服より却つて便利です。靴など儀式の時よりはいた事は御座いませぬ。禮服に和服を作れと云ふ事になりましたらそれこそ大變です、私共はあの詰襟が禮服に當るのを結構に思ふてゐます。

何かに仕事があると好いんですけど、田舎には恰好な仕事が無座いませぬので、外に儲かる工夫はつきませぬ、文部大臣は家内に田の草を取らせたらと仰せられますが、家内は子供の守をしてゐますし、別に守を備ふ様な事も出来ませぬから全く仕方がないのです。

何かに生きて行けぬ事はありませぬ。けれど餘り馬鹿らしいといふ感じはない



します。私は師範を出て既に七年ですが月収四十圓です。それに私の生徒は今年高等小學を出て、それから六ヶ月の講習か何か受け、今では郵便局で電信の係をしてゐますが、それで月収三十二圓ですからね。車掌や巡査だつて初任四十圓以上だと云ふちやありませんか。そんな事思ふと、何だか馬鹿らしいと云ふ氣が起りますよ。私共でも矢張り人間ですからね。出来るものなら甘い物も食べたいし、良い衣物も着たいのです。金があつたら妾も二人位置いてもみたいと思ひます。そりや何したつて生きて行けぬ事はありませぬからね。教員してのだけ死にしたと云ふ話はまだ聞きませぬ。然し憐う云ふ話があります。話と云ふから事實ない事かと云ふとさうではなく、これは實際あつた話なんです。或る教員の細君が、餘りの苦しさに夫たる教員に分れ話を持ち出した。それも

戸籍までどうすると云ふ譯ではなく、とにかく一時細君は里へ歸らうと云ふのであつた。ところが子供が二人ある。その子をどう仕様と云ふ事が問題になつた。一人宛と云ふわけには行かぬ、然し子供は二人共母親の方へ行くと云ふ。金に餘裕がつけばいくらか月々仕送つて子供を預かつて貰ふと云ふ法もあるが細君の口一つを里で養うて貰ふと云ふ位の事だから雙方都合が悪い。どうしたら好いだらうと幾日も安じたさうだがよほど氣が小さい教員だつたと見えて、とうとう子供を二人共殺して了つて自分も死なうと決心した。そして或夜窓かに天井から綱を吊しては一人で頻りに泣いてゐるところを、折よくも里の人に見つかつたと云ふ話である。その男などは正に生きて行けぬ中に入れなくてはならぬかも知れませぬね。



「憊うした話は外にもあるかも知れませぬ。とにかく教員の頭には重苦しい暗い影がかざしてゐます。何とかしてこの黑影をふき拂つてやりたいものと思つてゐますが、さして微力では何とも致し方がありません。どうでもして生きてさへ行期は好いと云ふては餘りではありませぬか。大事な國の礎を築く人ですものね。」

安價生活法

「君あれはまだかね」

「あゝも一日だけまつてくれ」

「早く見せてくれ」

「オ、君がすんだら、その次は僕だよ」

「學校にもつて來といたら僕は休みの時間に讀んで了ふんだがな」

「いや、實は細君にみせておかないといかんからな」

醫學博士、額田門氏の安價生活法一冊、まさに引つ張り凧である。

「君たちはあれをよんで得るところがあるかい」私はいいた。

「そりやあるさ、大にあるさ」

「うふん。君たちの月給は一體いくらだね」

「知れてるだやないか、二十五圓」

「あれは君、一食五錢と云ふが標準になつては居ないか」

「さうかね」

「五錢の三食で十五錢、月に四圓五十錢。一家五人とすればまさに二十二圓五十」



錢の食費を要する。それでも君安價生活かい」

M君もY君もT君も一寸頭を傾けてる。

「僕等の家庭ぢや一食まさに三錢だね。額田さんのあれなど、全く高價生活法だ。あんなものみると癪に障る事許りさ」

吾々にとつて安價生活法は問題ぢやない。若しその種の研究をしてくる人があるならば私は「食はずに活きる法」を教はりたいと思ふ。

私の家の御馳走。小さな花鯛(一尾六七錢)をからく煮付けたもの、それを三分して、一人がその一片をいだ、く事。

次は飛魚の乾物一枚を四分して一人一片づ、焼いていだ、く事。

鯨節を十片ばかり削つて並々と醬油をさし、その醬油を御飯にかけて載く事。ふだんはゴマ鹽ですます事が多い。

### 榮達發展の途

失禮な言ひ分だが今日の教育者の大半は物質生活に於ける弱者である。貧乏者である。自分の経験を云ふも恥しい話であるが俸給日から次の俸給日へ拾錢の銀貨さへ残つて居ない事が多い。あれやこれと支拂ふ可きを支拂ひ、購ふ可きを購うて尙あれもこれもと豫定の品が後に残つてるに係はらず、囊中既に幾干もない時、墓口を机上に放り出して溜息をつく事すら少くない。とやかく食ふだけの事はやつて行くもの、より偉大なる活動をなさんが爲に今少し豊かな物質生活がして見たいと思はぬ者はあるまい。自動車に女と二人乗り廻して得意がつてる男を見ても格別何とも思はないけれど、人が新刊書をどん／＼買つてるのを見ると自



分も何となく胸苦しさとする。晝も夜も日曜日も教育と云ふ事の外には何物も考ふる餘裕さへない迄に斯道の爲に没頭して居る。心を痛むる事も決して少くない。それにおきまりの味噌汁に澤庵、何だか恚う眼の玉が凹んで手の首が細くなつて来るやうに思へる。日曜日位はせめて馬の肉でも食はして呉れと臺所に申込めどこれもさる心はあり乍ら思ふに任せぬ心苦しさに苦い笑を洩らす位のもの。恚うした生活で凡そ何年活動が續けられやう、校長に機嫌を伺ひ、主席に媚を呈し、議員や村長乃至は父兄有志にまで一々頭の上らない平訓導の生活、兒童や細君にはえらさうな事を云つて居れど心密かに自己の姿を眺めるとき、何人か今一段の向上發展を思はぬものがあらうか。

口でこそとやかしく云へ何人と雖も榮達發展の道を考へぬものはあるまい。無形

の慰安、生ひ立ち行く教へ子の將來に自己の生命の延び行くかと思へば其處にいくらかの満足と慰安とを得る事は出来やうけれども、それとても此頃の乾燥し切つた世界にはさう先長く望みのあるものではない。自分の教へ子がもう大學を出て技師や郡長やになつて、先生と口にくそ云へ心では侮蔑の舌をペロリと出して居る世の中に、そんな淡い慰安で満足の出来るものではない。

せめて自分の子だけは一人前の人間になして見たい。高等教育位は受けさして、云ひたい物位言ひ得る人間になしたい、それにも矢張り今一段の物質が必要である。天爵であるとか神聖であるとか云ふやうな空疎な言辭はもう私等の頭にて何等の響きも與へぬ。優待論が幾ら唱へられても「學校教員」かと頭からけなしてかゝる時代に、私達は如何しても安んじて現位置について居られない。



ひら訓導は主席に、主席になつたら校長に、まかり違へば視學に郡長に、いや  
 附屬訓導になつて見たい、高等師範の訓導はさぞ好いだらう。それよりも一圓で  
 も五拾錢でも月給が昇つて欲しい。一步にても向上發展の途を辿りたいと希ふの  
 はあながち私ばかりの心中でもあるまい。あらゆる人の心の中を忌憚なくさらけ  
 出したらきつとさうだと思ふ、最も今の小學教師仲間にも叩いてもはぢいても鳴  
 らぬタガの切れた弾力のない人間も随分少くはない。然しそれらの人すら月給問  
 題になると頗る過敏に神経を働かすらしい。と云つて何も不思議はない、それが  
 人情で實に正しい事であり亦かくあるべき筈のものであるから。  
 然り、吾々は一段と自我の充實を計り、更により立派なより正しい教育者とな  
 り正當強大なる活動をなささんが爲に一步にても現在の位置より向上發展し行かん

事を望んで止まぬ。元より只それのみが自己の全生活ではない。吾等にも亦一片  
 の意氣は存在する。支那人のやうに頭を擲られても金を欲しがらるものとは聊か桁  
 が違ふ。月給さへ上げて呉るれば何事も人任せになるかと云ふとさうでもない。  
 發展のため榮達の爲には義理も絲瓜もあつたものではない。蠅の甘きにつくが如  
 しかと云ふと大に然らずで、そこに吾等の止むに止まれぬサムシングが存在す  
 る。問題は其處に展開されるのである。  
 かくすればかくなる事と知り乍ら止むにやまれぬ大和魂は今も尙存在する。  
 輕浮汚濁利の爲には全然自我を枉げて走狗ともなり兼ねまじき人の多い世の中  
 はあるが吾々の心のどん底には何か知ら枉げ難い或物があつて常に闘争を續け  
 る。榮達を欲する心と自我を伸展しようと努むる心とは慥に調和しない。多くの



場合、多くの人は我を屈して榮達を欲する。さうなるともう問題にはならないのだ。然し吾々は自我のない教育者に教育の可能を信ずる事は出来ぬ。若し人の云ひなりにどうしてもなるものであつたら何も態々金をかけて教員を養成する必要はない。蓄音機位で十分である。吾々は器械ではない。突鐵砲ではない。一寸にても五分にても魂がある以上その魂を兒童にびつたりと結び付けて行きたい。無意味の活動や取次では如何しても満足する事が出来ぬ。恚うした吾々の態度は多くの場合上に立つ人の機嫌を損ねて常に人望をなくするものである。そこに榮達の路は閉塞さる。可惜俊秀の人材がかゝる事情からかゝる境遇に落ちて世に拗ね人に逆らひ空しく野に朽ち、山間僻地の單級校などに貶謫せられて居る人は決して少くない。殊に力もない癖にお上手に立廻りペチ

や／＼やつて行く爲に柄にもない位置に嚙り付いて氣取つて居るものも少くないと思ふ。私の或る友が私の態度を氣遣うて泌み泌み忠告して呉れた事がある。世の中と云ふものは君のやうな一本槍では行かん昔から「一ひき二やき三つくばい四力量」と云つてあるではないかと。成程うがち得た言ひ事だと思つた。單に教育界と云はず所謂知遇なくして榮達し得る人は誠に少い。官界の如き特に然りて夫々のひきがあつて始めて始めて相當の地位がかり得らる。私の知つた處で自分の叔父が縣視學をして居た爲に郡視學に上げられた人もある、最もその人は自分の力がなかつた爲に散々郡會で油を絞られて引下つたけれどもこんな例は教育界にも決して少くはない、たとへ秀才であつても人物であつてもひきが悪くては駄目であ



る。收賄贈賄の沙汰は昔から絶えた事がない。僅か白砂糖一斤でも中々に利目は多いものと聞いて居る。物質の如何よりも矢張り人の感じと云ふものが違ふのだから、自然によくして来る、自分に逆らはないと云ふ態度がその人をして満足させるのである、第三のつくばいに至つては今日さ程の効力もあるまいと思はれるけれども事實は中々さうでない。人によつては案外威張りずきな氣取り屋のお人よしがあるものだ。座作進退鞠躬如として來なければ氣にくはない。傲然と別室にかまへて部下教員を頤使しようと云ふやうな性の人も多い。さう云ふ人に仕へるには實につくばいに限る。びたりと頭を下げて先方をあがめ尊んでさへ居れば榮達疑ひなしである。その代り靴位磨いてやるのは朝飯前と考へて居なくてはならぬ。いやはや私共にはとても出來た事ではない。かくて自己の實力と云ふもの

は漸く第四位にある。力量一本を以て世に立つと云ふ事は誠に難い哉だ。ひきもなく、賄賂を送るには餘りに貧乏で、さりとて人様に向つてぺこぺこつくばふ事も出來ぬ私共にとつては榮達發展と云ふ事は實に大なる困難である。賄けばよい、つくばえばよいと云ふ事を知りつゝ、もそれが出來ない、いくら忠告されてもそんな事をなし能はぬ私共は到底發展の途がないものだらうか。それはまだ君が圭角がつぶれぬからだ。もう二三年したらよくなると先輩から云はれた其三年はとうの昔過ぎた。私の圭角は依然としてつぶれない、否寧ろ伸びつゝあるやうな氣がする。私共は圓滿とか溫健とか云ふ事を惡徳とは無論思はないけれども亦大した美德とも思はぬ。好んで自ら圓滿の人溫健の人に墮し行く事を大なる恥と心得て居る。若しも私の圭角がくだかれ所謂溫健な人物となつた時、其時こ



そ自我の發展が止んだ時で即ち心の止つた時である。さうなる事は死に等しい。精神的の死である。私はさう早く死にたくはない。私共は子供の操行を査定する時に所謂おとなしい子、雨でも降ればちやんと机について人の騒ぐのを見て居るやうな子、運動場では垣根にしやがんでるやうな子に對して決して甲をやらな  
い。彼等は悪人でない迄も決して國家社會の爲に偉大なる功獻をなすものではない。教育者として此自己の立場を案ずる時私は決して此の如きおとなしい人となる事を欲しない。然し乍ら社會や校長やは此種のおとなしい教育者を優良と心得て居るから堪らない。

如上の事實、如上の思想は既に久しい間教育社會を支配した。然し舞臺は廻つた。役者は可なりに變つて來た。自我の叫びを眞向にふりかざしつゝ雄々しい悪

戦苦闘を續け遂には自ら運命の野を拓り開いてそこに光明の花を咲かして微笑んで居られる先輩もある。ひきもなくやきもせず、さりとてつくばひまはるが如き事もなく飽迄も自己の力量に信頼して孤軍奮闘遂に自己の地盤を築き得た人もある、然しそれは數に於ては實に少い。殊に時勢の進歩に後れがちの田舎に於ては實にかゝる例は少い。少いとは云へ時勢は既に變りかけて居る。新時代が來て新人物が發展し向上し行く日は決して遠くはないと信ずる。よしや其の時を得ずして空しく野に朽つとも安價なる妥協生活に墮し行く事は出來ない。只自己の信ずる處に従ひ正大なる活動を續け奮闘の斧を振り行くこそ實に榮達發展の唯一の途ではあるまいか。只だ舊時代の殘留者を葬らんとあせるの餘り勢急進となり焦燥となり、悪罵を試み、破壊をのみ之れ事とせるが如きは發展の捷路ではない。



それが爲に意外の蹉跌を招く事も少くない。左顧右眄は優柔不斷者のする所。慕然奮然他を顧みず自己の住める社會の真相をも解せざる猪勇も亦謹むべきである。よく自己の住める雰圍氣を解し然して後自己の斧を磨け。最後迄信頼すべきは決して人ではない。ひきもやきもつくばいも遂には其の功をなさぬ時が来る。只自己の力量のみは永遠の信頼者である。發展榮達の道を他に求めんと欲するは一時の術策か幻覺かにすぎぬ。(五、八、教育實験界)

若い主事さん

新設附屬小學校と云ふのでとかく世間の視聽が集まり易かつた。主事は元より、訓導も全縣下からの一粒選りと云ふので、その世人の期待に逆くまいとてそ

こに可なり神經過敏な焦燥があつた。わけて急進的な私などは一刻も早く相當の成果を上げたいとの念に燃え立つた。然し總ては思ふ様に行かなかつた。相手と見る可き他の師範には有名な辣腕の主事がある。檢定出ではあるが實に海に千年山に千年の概があるやり手。それに比ぶると内の主事などは年も若いし全然お坊ちやまである。

そのお坊ちやま然たる私共の主事〇さんは、頭こそ緻密だが何れも一僻ある訓導連を統ぶべく餘りに若かつた。第一學期の間こそ大した問題もなくしてすんだものゝ、九月十月と立つ内に早や〇さんに對する一同の物足りない感じが、どうかすると頭を擡げさうであつた。

『あゝ、びくびくしてゐちやとても何事も出来やしない』



『そして徹頭徹尾△△や○○の模倣だしね。もちつと獨創的な處がほしいもんだね』

恁んな話しが訓導連の間に交はされた。既に多くの人が試みて行き詰つて居る月並教育、俗臭紛々たる附屬小學にはもう飽いて居た。

『才子は才子だね。何か他人の話しをきいてる中にちやんともう其の先を悟つて自分のものにして丁ふ手腕はたしかに偉いよ』

『だから人真似ばかりして間口を廣めるんだよ』

『だからやる事が突發的だ』

『まあ御互に主事を教育するつもりで居なくちや駄目だよ』

恁うした氣分を醸成して了つた以上、○さんの立場も中々困難な位置にまで陥

つて了つた。或時は又こんな事もあつた。

『オイ、今日は一つ主事の内に押しかけようぢやないか』

『よからう』

『そいつあ面白い』

『奥さんがびつくりするだらう』

『何、かもうもんか。あんなしみつたれ、うんと奢らしてやれ』

若い訓導連は何れも鯨飲馬食黨であつた。主事が一度も吾人を招待した事がな  
いと云ふのが可なり不平であつた。何かあると一同は集まつては飲んだ、騒い  
だ。そしてメートルを上ぐるのであつた

『どうも此處の連中は食ひ辛棒ばかりだ』と云ふ言葉が主事の口から發せられた



ときいた時には流石の一同も地駄太んで怒つた。

「何、吾々は飲み食ひそのものには何の興味も必要もないんだ。彼が吾人の行動を此の如く解する間は所詮駄目である。一同が打寛いで飲んでる中に、そこに云ふに云はれぬ情味が湧いて来るぢやないか」

「さうだよ。しみつたれだからあんな事云ふんだよ」

「ほんとにしみつたれだな」

「仕様がないな」

これから主事の信用は全く地に墮ちて了つた。

禍か福か

ひきもなく、やさも出来ず、つくばひもなし得ぬ私は自己の向上策として只勉強するより外なかつた。然して其の方法の第一としては先づ文検であつた。無論私とても文検の一つや二つや合格したからとて、へつぼこの中等教員など仕様とは思はなかつた。又中等教員そのものが小學教員よりも偉いとも、上だとも思はなかつた。でも検定に合格すると云ふ事が何だか登龍門のやうに思はれて居た。

殊に主事の教育意見に不満を感じずる私は、是非共自分一個の考へなりとも確立して迷ふ事なき教育的見解を定めたいとの念慮が強かつた。果然私はその年の八月の文検教科豫備試験に合格して居た。然も成績が發表さるゝ迄同僚の誰れ一人も知らなかつた程私はこつそりとやつた。



十月の末、貧しい財布の底をはたいて幾度ミルクホールのテーブルに腰を下ろしたらうか。明朝學校に行けば來てる筈の官報が、明朝までまらきれないのである。一刻も早く見たいのである。そしてとうとうそのミルクホールの官報で、合格者の中から自分の名を發見した時、ほんとテーブルを叩き乍ら立ち上つた程の私の喜び、私はその喜びを今だに忘るゝ事が出來ない。

本試験の爲め上京、その頃私の生活から五十圓と云ふ旅費がどうして出來たらう？折角通つたものを旅費がないからとて放擲しなければならぬのか。時が來ればどうにかならうとの空だのみも實際空だのみに終らんとして居た。それを主席のSさんが非常な骨折りて私の爲に幾千かの私金を提供して下される。其と一方校長を説いて學校から視察を命じて相當の旅費を給すると云ふ風にしてくれる。

かれやこれやの好意で私は心配なく上京する事も出來た。恚うした曰く付の結果であるその合格が私の爲、はた學校の爲、如何程の仕合せを招來したであらうか。思ひ出す程私は癪にも障れば、はづかしくもある。

十月十一月と私共の主事に對する不満は募つて行つた。そして私より上席であつた、Y君M君の二人と私とが最も痛切に其の不満を感じて居た。その爲に三人は折々會合しては熱を高めメートルを上げた。何とかしても少し成績を上げねばならぬ。主事を鞭撻しなければならぬと焦つた。然し私等にもこれと云ふ名策はなかつた。結局はお互にもつともつと勉強しようぢやないか。そして着々實際の研究を進めよう。よし主事があつたとしても吾々の力でちやんとした結果を上げれば好いちやないかと。



果然！實に果然！

「彼は主事を放り出してその後を覗つてるのだ」との噂が思ひがけない邊から私の耳にはいつた。師範を出て五年そこらの私としては此の噂は誠に身に餘る光榮であつたかも知れない。

文檢合格、それは果して私の爲に福であつたか、禍であつたか？

學務課長邸の一夜

大正何年の正月元日。私は扁桃線を病んで床について居た。今日の儀式、式後の宴會、YやMやがどんな事をやるだらう。主事の訓告が又問題にならねばよいが、など、寢床の中で考へて居ると、門の外から「オイオイ」とはしやぎつ、は

いつて来るものがある。

「何だ、正月早々からねるなんて、さあ起きた、起きた」

MとYとは案内も挨拶もなく私の枕頭に坐つた。二人共頬は櫻色、眉宇の間に包みきれぬ或物が躍動してゐる。有無を云はず私にはね起きた事は勿論である。まア一杯と家内がすゝむる屠蘇もそこ〜に三人は外に出た。折あしき元朝の微雨が行き交ふ人の赤い顔を打つ。

三人は雨をさく可く某寫眞館に立ち寄つた。そして何かの紀念にと撮影した。

雨は依然としてはれぬ。三臺の車は縣視學某氏の宅の玄關に梶棒を下ろした。

偶然にもそこには主事のOさんも首席のSさんも來て居た。そして學務課の屬たちも交つて可なり盛んな氣焔が上つて居た。そこに吾々三人がとび込んだと云



ふ事は、まさくに石油を注ぎかけた樁火の概があつた。「君が張本人ぢやないか、オイ、餘り苛めちやいかんぞ」屬のA君が好い加減酔つぱらつた口から私に喰つてか、つた。私はそれを好い加減に受け流す可く餘りに意外な攻撃であつたのである。

『アツハハハ。何、張本人。そんなもんがあるかい。あれはまだ子供だよ』首席のSさんが横から口を入れる。

私共は話題の中心が、即ち吾々の問題であり、我が校の近況、然もそれは可なり透徹した邊まで暴露されてると云ふ事を悟つた。私はYやMと叫び合つて好機來を喜んだ。

其の日ののさんの活動振りは可なり目ざましかつた。學務課同人の援助(?)

があつたからか、とにかく吾等一同を向ふに廻して相當な氣焰を上げて居る。私共は大勢の否なるを悟つた。然も幾度か視學に突撃したが彼は依然として私共の云ふ事を斥けた。ともかくも私共が悪いと云ふ事にきまつた。

それから一同は次から次へと飲み廻つた。そして夜もおそく三人は歸路についたが、如何にも物足りない思ひが心の底をかけ廻つて居た。

『行かうか』

『行かう』學務課長官舎の前を通る時三人の心に、物足りない或物が擡頭した。

『もう餘り遅いな』

『然し此の機を逸しては駄目だ』

『さうだ、明日にも視學は今日の顛末を課長に話すだらう?』



「行かう」

「行かう」議は一決した。

官邸の應接室は盃盤狼藉今引き上げた許りの客の匂が残つて居た。

「やあよく来たね」課長は歓迎した。

此の夜三人が如何なる事を語つたか、然して又課長がどんな返事をしたか、それは現内務省書記官道路課長S氏の外に知る人はない。ともかくも私共は淡き失望と一種の不滿を抱きつゝ、其の邸を引上げた事だけを記しておく。

教員出世がしら

座はMとYと私の三人である。

「僕は模範的體育中心の學校を作る事を以て一生の理想とする」體操主任のMが肩をそびやかして云ふ。

「それも好いね、Y君はどうせ郷里の校長に歸るだらう」

「さあ。田舎に歸つたところで仕様がないなア」

「矢張り市の方に出た方が好いだらう」

「さうも思つてる。そして君は？」

「僕、僕はもういろ／＼に考へるんだ。君たちには相當の資産もあるし校長さんになればそれで好からうが！」

「何の資産、そりや君の事だ。僕なんかマイナヌ八百圓」

「まアY君だけかね。そこで僕はだね、僕はこれから高等文官の試験でも受けよ



うかと思つてるが』

「へえ 豪い鼻息だね』

「考へて見給へ、田舎の校長になつた處で精々六十圓がとり頭ぢやないか、六十圓で君、我子の教育が出来るかい。中學に入れたつて月二十圓はかゝるよ。依然として子も亦師範校の御厄介になるなんて、とても僕には出来ない』

「君は資格があるから中等教員になつたら好いだらう！』

「中等教員、それこそ眞平だ。見給へ主事の〇さんだつてあの通り火の車ぢやないか。主事と云へば中等教員ぢやもう相當な位置だよ。然もその主事になる事は仲々以て容易な事ぢやないからな』

「なる程。その點になると彼の木元さんなんて豪いもんぢやないか』

「あれかい、そりややり手だからね、それに御大を控へてるからね』

「御大で誰れ』

「督學官の杉山さんさ』

「杉山さんの乾分かい、道理で』M君は感心したらしく首を傾ける。

「矢張り一ひきだな』

「あつハハハハ、だが然し引きばかりでも行くまいよ。あれでも女高師時代は随分苦心したらしいよ。檢定をとるためには夜學に通つたりなどしてね』

「さう！』

「然しまあ、えらいもんだね。田舎の一教員から主事まで漕ぎつけたんだから』

「之れを以て教員出世頭となすか……』



「ハハハハ」

「君もこれから高師にでも行つて、主事になつたら如何だ？」

「駄目々々、第一ひきがないしね。それに君、主事になつた所で今云ふ通り決して樂ぢやないよ。見給へ木元さんだつて苦しい證據にはあつしていろんな書物をどんどん作るぢやないか」

「全くだね。ぢや實科女學校長はどうだ」

「馬鹿な。これ位つまらんものがあるかい。市立などはまだいくらか好いがね、地方の郡立など、來たら誠にみじめなものだよ。第一經費はないし、俸給だつて矢張六七十のものだらう。それに郡長は元より、郡會議員などにべこべこしくなくてはならぬ事、全く小學校長以上だよ。それは誠にみじめなものさ」

「ぢや一體、どうしようと云ふのか」

「だから云つてるよ。高等文官の試験を受けるつて」

「君は筆が立つから新聞記者になつたらよからう」

「駄目よ。田舎記者でどうする」

「何、大新聞の記者になるさ」

「どうしてなるかい」

三人は椎の實の殻をむきむきぼりぼりやつて何時までも語つた。

少尉も元帥になれる時が来る。一屬官も大臣となりうる。碌に中學も卒業せぬ者ですら尙且つ郡長、理事官たりうる例はいくらもある。吾等が卒業即下貫ふ十八圓の俸給（今日は二十五圓にもなつてるだらうが）は新卒業者の一人ものとし



ては決して低劣ではあるまい（私のやうなものにとつては全く話にならぬ程惨めだが）然しその終局のどん詰めが見えすいてゐる。最高百五圓など云ふ制度もあるはあるがそれは日本全國に於て五指を屈するにも足らぬ。これで居ていくら鞭つたところで行く先が見えてゐるのだから、後の鳥が先になる事が出来る譯ではないし、一步一步押すな押すなと登つて行かねばならぬ吾等の道程、然もその見えきつて居る終點に達する事の如何にまどろしき事よ。健脚者は却てそこに疲勞を覚える。もつてる力も長く使はぬ中に何時か消散して了ふ。低い天井の下でどのどやと、蠕動してゐる人々の身の上を思ふと私は涙がこぼれてならぬ。

米國の小學校に男教員が少なくて、女教員が過半を占めて居ると云ふ事は常にきく事であるが、我國でも漸次其の傾向が著しくなりつゝ、あると思ふ。これは全く男らしい男に教員と云ふ生活が見くびら

れつ、あるからだと思ふ。「何、教員なんて男のする事ぢやない」恚うした考へが米國人にもあれば我國人の頭にもだん／＼強くなつて來つゝ、あるからであらう。實際氣概のある男のすべき仕事ではないのか？そこに一段の研究を要すると共に、今にして之を解決しておかぬと、將來はとり返しのかぬ大問題となるであらう。

風聲鶴唳

學務課長官邸の一件があつてから、事の總ては暴露して了つた。校長がよばれる。主事がよばれる、當局も可なり神經を興奮さしたらしい、其の結果として三人は校長室に呼び出された。元より期するところ、先方の出様によつては自分にも覺悟があると、決心の臍が一度固まれば天下何物も恐るゝものはない。だが然し校長は餘りに温和な人であつた。私共は拍子抜けして歸つて來た。そしてあ



のおとなしい校長に對しては、今しばらくは我慢しなくてはなるまいとあきらめた、そして平凡な幾日か流れて、三月のある日、然も夜おそく私の戸を叩くものがある。

はて今頃と審しむ乍ら戸を開くと思ひがけなくも主事の〇さんである。

「如何しました」

「いや一寸」

「あ、さうですか、どうぞお上り下さい」

座が定まると〇さんは直ちに本問題を切り出した。〇さんとしては珍らしい事であるが、事體がそれ程急迫して居たらしい。

「實は今、校長から呼ばれて種々話があつた所だがね」如何にも容易ならぬ問題

らしい口ぶりである。

「何事です、早く要點を云つて下さい」

「君の一身に關する問題だがね」

「うふん、さうですか、先生僕を釣りに來たなあと思つたので殊更空うそぶいて見せた、

「校長は此の際斷然處決して了へと云つてるんだがね」

「は」

「そこで、僕は一寸待つて下さい。ともかく一應本人にも話した上でと願つて來た次第だがね」

「は」私の胸は可なり烈しい動悸を打ち初めて居たが私は依然として平靜を



装うて居た。

「で、一帯君は如何思ふかね」○さんは何物かを引き出した様なそぶりて私の返事をまつた。

「一帯何の話ですか」

「いやその、何だがね、實はその校長が頻りにさう云ふものだからね」

「校長何と仰言いますか」

「今もいふ通り、此の際やつて了へと云ふんだらう、然し君だつて困るだらうと思ふから」

「は、分りました。校長さんが私を誡らうと仰言るのですか」

「まア、そんな譯だが、そこは何とか又……僕にも多少考ふる事もあるのてね」

「では、あなたに頼めば助かると云ふのですか、ふうむ」

「いや、さう云ふ譯でもないが」

「ちや矢張り私の首はなくなるのですか」

「いやさうぢやないがね！」

「ちやどう云ふ話なんですか、さつぱり私には分りませんがね。いや誡りなさるなら、お先に私の方から御免蒙りませう。天下は廣いし、私の活きる世界は外にもありますからね。だが然し一帯今頃どう云ふ譯でそんな話が出るのでせう。又何を楯に私を處分しようとなさるのですか、私の體は御承知の通り公立學校職員分限令で保證されてる體ですよ。私に何失敗があつたと云ふ譯でもないのでせう。そりや何かの間違ひぢやありませんか。今夜はもう大分遅う御座



「いますし、明朝お話があつたらお出になつては如何です」  
 「いや、僕もさう思つたけれど校長が大へん怒つて、今にもと云ふもんだから……」

「校長さんが何に怒られたんです」

「何につて、君。君が中心になつて、又例のを計畫してらだらう」

「例のとは？」

「今日、△△で密會をやつたぢやないか」

「は、あ、あの事ですか」

「うむ」それ見よと云はぬ許りの得意さがさつとUさんの面に表はれたが、私はおかしさに思はず吹き出した。それはなるほどMとYと私と三人が、よりつ

けの店によつて話をした事は事實であるが、其の話の内容そのものと云ふのが餘りにかけ離れて居た事實であつたので。

「大分おそくなりましたから、簡単に申しませう、あれはU君の妻帯問題に就て一寸相談したまでです。より以上の事はあなたの御勝手になさい。鹹りになりま

すなら二三日前に一寸知らして下さい」  
 Oさんは何かとお世辭を残して歸つた。翌朝私は寢込に校長を訪れたが、話が餘りに違ふので、あいた口が一寸ふさがらなかつた。

教員成金

それは或年の九月であつた。長の夏休みを了へて各地から集まつて來た同僚十



「数名が、せんべいを噛り乍ら何かと夏休み中の見聞を話し合つた『○○の△△訓導は流石に偉いな、』M君は△△氏の綴り方講習を受けて歸つたのであつた。」

「ふん、どんな人かい」

「どんな人つて、丈の高い色の黒い人だが、そりや實に痛快な人だ。話す話す、もう引つきりなしに話すんだよ。見識もあるし、兎に角該博だね。それにちつとも氣取らないところが好い。僕が遊びに行くと。ごろりと寝ころんだまゝ、滔々數萬言、藝術を談じ、教育を論じ、政治を語るところ、誠に立派な大家だね」

「そして、君は△△氏の綴り方に感心したかい」東京に講習に出たY君が云ふ。

M君はこれは又以外な事をと云はぬ許りに、

「そりや君、僕全く參つて了つたよ。何れ詳しく報告するがね」

「ふうむ。それが君、あの同僚の□□訓導の研究とそつくりだと云ふ話だよ」

「へえ」私は餘りの思ひがけない話にびつくりして言を入れた。

「まさか、そんな事はあるまい」

「いや、僕も噂をきいただけだから真相は知らぬけれどね、ともかくも才物だね。人の研究の先をとるなんて事は全く朝飯前ださうだよ」

「よい誰かに似てるぢやないか」悪口家のY君が慙う云つて、ちつと主事の顔を偷みみた。私等は△△訓導の綴り方教授法刊行に關する妙な話の筋を可なり詳しく聞いた。

「東京の連中は流石に豪氣だね」話がとぎれたのでY君が語り出した。

「ふうん。△△以上のがあるかい」